

資料と解説

「ターリバーン」の政治思想と組織

— 「アフガニスタン・イスラーム首長国とその成功を収めた行政」

「ターリバーンの思想の基礎」 翻訳・解説 —

中 田 考

序

2009-2010年にアフガニスタン・イスラーム首長国（ターリバーン）公式サイトのアラビア語版に「ターリバーンの思想の基礎（1—5）」と「アフガニスタン・イスラーム首長国とその成功を収めた行政」という二つの論文が掲載された。ターリバーンについては内部資料が乏しく、これまで研究が立ち遅れていた。上記の二論文はターリバーンが思想と組織についての自己理解を体系的に語った貴重な文書であり、ターリバーンの理解、ひいてはターリバーンとの和平のための必須の資料である。そこで以下に簡単な解説を付し、全文を訳出したい。

第一部：解説

ターリバーン運動の分り難さ

ターリバーン運動は、旧ソ連の占領軍を撃退したムジャーヒディーンの軍閥間の内戦に対して立ち上がったマドラサ（イスラーム学校）の学生たち（ターリバーン）の世直し運動として始まった。しかし彼らの閉鎖的な振る舞いもあり、その支配当時から彼らの政治思想は謎に包まれており、政権崩壊後運動が地下に潜伏するとますますその実態は不明になり、西側・反ターリバーン側の反ターリバーン・プロパガンダの色眼鏡を通して以外に、彼らの政治思想を知ることが事実上不可能な状況が続いていた。

ターリバーンの公式サイト

ところがここ数年、ターリバーン運動の広報は急速に洗練の度を増し、西側メディアさえ彼らが米国を凌駕しつつあることを認めざるを得ない状況が生じている¹。

アフガニスタン・イスラーム首長国（ターリバーン）は、ペルシャ（ダリー）語、パシュトゥー語、英語、アラビア語、ウルドゥー語の5か国で、毎日のアフガ

ニスタン国内での戦況報告を中心に、アフガニスタン・イスラーム首長国（以下「首長国」と略す）の公式声明や論説などを掲載する公式サイトを運営している。

この首長国公式サイトは、ターリバーン運動の現状を知る上で必須の貴重な情報源であるが、戦況報告や声明文など、分りやすく短い記事が殆どであり、ターリバーンのイデオロギーを包括的に論ずるような長文の論文は殆どない。

「ターリバーンの思想の基礎」

ところが同サイトのアラビア語版だけに 2009 年から 2010 年にかけて 5 回わたって「ターリバーンの思想の基礎」と題された長文の論考が掲載された。「ターリバーンの思想の基礎」はパキスタンで発行されているターリバーン系アラビア語雑誌『アル=スムード（抵抗）』

からの転載であり、アラビア語が原文であるが、首長国公式サイトの記事の殆どが 5 か国語で同時に発表されていることを考えると、かなり特殊な性格を持つ論文と思われる。

アブドルワッハーブ・アル=カーブリーの署名があることから、著書はカーブル出身のアフガニスタン人である。そのアラビア語は、著者が現代のイスラーム主義反体制武装闘争派の言説に知悉していることを示しているが、なお「Hukūmah」の語の用法などにペルシャ語の影響が見られ（現代アラビア語では「国家」でなく「政府」）、アラブ人の偽名ではないと思われる。

「ターリバーンの思想の基礎」は第 1、2 講においては、(1)「ターリバーンの創設者と指導部のイスラームの理解」、(2)「思想、行状、政治、制度における西欧文明の生んだ退廃による思想と知性の汚染の不在」、(3)「国際秩序、国連、その法令、決議等と称されるものに裁定を求めないこと」、(4)「アッラーの宗教のみに忠誠を捧げ虚偽の徒との取引を拒絶すること」、(5)「領主と世俗主義者の指導部からの追放と（イスラーム）学者と宗教者の指導部によるその代替」、(6)「民主主義を現代の無明の宗教とみなし信仰しないこと」、(7)「一致団結と無明の民族主義の拒絶」、の 7 原則が論じられ、第 3 講では章立てがなく、第 4 項講で (10)「ターリバーンの女性観」、第 5 講で (11)「ジハードとその装備」、が論じられている。おそらく第 3 講の 8 章 9 章にあたるものは [8、9] (8)「純粹イスラーム的方法に基づくイスラームの実践」、及び (9)「政治的制度的行動の方法における西洋への門戸の閉鎖」と思われる。

ターリバーンの排他主義と柔軟性

この章立て、特に 10 章「ターリバーンの女性観」、11 章「ジハードとその装備」の存在から、本論文がターリバーンのイスラーム学的思想基盤の内在論理を明ら

かにすると共に、ターリバーン運動の外部の人間に対して「女性を抑圧し、異教徒に見境なくジハードを仕掛ける好戦主義者」とのターリバーン運動への誤解を解くとの目的をもって書かれていることが窺われる。(但しアラビア語のみで書かれていることから、想定されている「外部の読者」は異教徒ではなく、「穏健派」と呼ばれるムスリム知識人であろう)

これらの章立ての「西欧文明の生んだ退廃による思想と知性の汚染の不在」、「政治的制度的行動の方法における西洋への門戸の閉鎖」といった文言から明白なように、ターリバーンは自らの立場を、宗教学の他宗教理解の類型論 (1) 排他主義、(2) 包括主義、(3) 優越的置換主義、(4) 多元主義、を適用するなら、排他主義であると、しかもいかなる妥協もしないことを強調しながら公言していることになる。その一方で、ターリバーンは、女性の教育を奨励し女学校も認めていること、西欧の科学や技術を学んだ者の国政への参加を拒否するわけではないこと、アフガニスタン国外にいかなる領土的野心もなくあらゆる国と共存する用意があることも表明している。

それゆえこの「ターリバーンの思想の基礎」は、ターリバーンにとってどこまでが柔軟に対応できる「政治的」領域、どこからが譲れない「原則」であるのか、を知る格好の資料ともなっているのである。

イスラーム主義武装闘争派としてのターリバーン

章立てからも明らかなように、ターリバーンにとって、天啓のシャリーア(≡イスラーム法)以外のものを従うべき権威(≡法)とすること(tahkīm, ihtikām ilā ghair mā anzala Allah)は、単なる罪ではなく、唯一神崇拜(タウヒード)の根本教義に背く不信仰(kufr)、多神崇拜(shirk)である。これは思想史的にはイブン・タイミーヤ(1328年没)が唱えた理論であり、ワッハーブ派運動を介して、元サウディアラビア王国ムフティー(イスラーム教義最諮問官)ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アール・アル＝シャイフ(1969/70年没)によって現代の人定法体制一般を不信仰と断ずる政治理論として再定式化されたもので、ナショナリズムを現代のジャーヒリーヤ(無明)と呼ぶサイイド・クトゥブ(1966年没)のジャーヒリーヤ論と共に、現代のスナ派イスラーム主義武装闘争派の理論的支柱である。言葉遣いからも、この著者がスナ派イスラーム主義武装闘争派ネットワークの内部の人間であることは明らかである。

ターリバーンの穏健性

しかし、イスラーム主義武装闘争派の中ではターリバーンはむしろ「穏健派」に属する。イスラーム主義武装闘争派の中での「穏健派」と「過激派」のメルク

マールは、思想と、その思想の信奉者を区別するか否か、である。天啓のシャリーア以外の人定法を法とする民主主義が不信仰、多神崇拜であることは、イスラーム主義武装闘争派の共通理解であるが、思想とその信奉者を区別せず、民主主義者を不信仰と断じない者ムスリム全てを直ちに背教者と断じ、その殺害を許可、あるいは義務付ける者がイスラーム主義武装闘争派内の「過激派」である。一方、思想と信奉者を区別し、民主主義は妥協の余地なく不信仰、多神崇拜と断じても、その思想の信奉者についての判断に関しては、裁判による吟味を経ない限りは背教者とは断じず判断を保留するのが穏健派である。

ターリバーンの武装闘争の論理は、基本的に、異教徒の占領からのイスラームの国の解放であり、これはイスラーム主義武装闘争派のみならず、スンナ派シーア派を問わず全てのイスラーム学者に受け入れられるものである。彼らが異教徒の手先として非難する世俗主義者に対しても、異教徒と協力してシャリーアの施行を妨害していることが問題なのであり、彼らが帰順さえすれば、その内心の信条を問題にして背教者として処刑しようとのキリスト教的「異端審問」「魔女狩り」を行うような心性はターリバーンには無縁である。

正統カリフの後継者としてのターリバーン

イスラーム主義武装闘争派としてのターリバーンの示差的特徴としては、正統カリフの後継者との自認を挙げることができる。イスラーム初期三代の理想化、クルアーンとスンナへの回帰の提唱自体はイブン・タイミーヤの流れを引くスンナ派イスラーム主義全てに共通する特徴であり特記するに足りない。しかし現代スンナ派イスラーム主義の主流サラフィー主義やワッハブ派は、法学、神学、スーフイズムなど狭義の「宗教」に関しては、後世の伝統を否定するが、カリフ論においては、スンナ派伝統主義の覇者のカリフ論を追認し、イスラーム学の学識と高潔な人格というカリフ条件を欠く統治者の支配をあからさまに拒絶することはない。

しかし「ターリバーンの思想の基礎」はウラマー（イスラーム学者）の輔弼を受けて善政を敷いたアル＝アイユービー（サラーフディーン：アイユーブ朝始祖、1193年没）、アル＝ガズナウイー（マフムード：ガズナ朝在位 997-1030年）、アル＝ムザッファル・クツズ（バフリー・マムルーク朝在位 1259-1260年）のような例外を除き、正統カリフ時代以降のイスラーム政治史を腐敗墮落した政治として全否定する。

ターリバーンの正統カリフの後継者の自認は、同じく『アル＝スムード』からの転載の無署名論文「アフガニスタン・イスラーム首長国とその成功を収めた行政」ではよりはっきりしており、首長国の行政制度が「正統カリフ時代のカリフ

制の諸原則に立脚している」と明言されているのである。

ターリバーンとウラマーの統治

ターリバーンの理解における正統カリフの統治とは端的に言ってウラマーによる統治である。それはアブー・バクルのカリフ位就任が「指導権 (qiyadah) が知者 (アーリム：ウラマーの単数形) から知者に移った」と形容されていることから明らかである。「この地においてモスクの導師が約千年振りに、政治的最高指導権 (imamah 'uzma：カリフ位) を再び手にし、モスクの導師こそが、他の何者よりも、最高指導者職に相応しいこと、そしてそれこそがアッラーの使徒と正統カリフたちの慣行 (スンナ) であることを改めて確証したのである」との言葉は、ターリバーンが他のスンナ派イスラーム主義武装闘争派とは異なり自分たちこそが正統カリフ以来絶えて久しいウラマーウの指導する正当なイスラーム国家を建設するとの強烈な自負心を抱いていることを示している。

この点において人定法を不信仰と断ずる同じスンナ派イスラーム主義でありながらターリバーンはサウジのワッハーブ派と根本的に違っている。イスラーム学者にして宗教改革者であったムハンマド・ブン・ワッハーブ (1792 年没) とナジド地方の豪族ムハンマド・イブン・サウード (1765 年没) の政教盟約によるサウード家の保護によって教勢を拡大したワッハーブ派にとって「政権と教権の分離」は大前提であるため、ワッハーブ派はウラマーが為政者となるべきとは考えず、サウード家の世襲王権を認め、一般に政治には出来る限り係わらないとの態度を取る。ターリバーン運動に対してワッハーブ派ウラマーが影響力を有さないのはけだし当然である。

ターリバーンとジハード

ウラマーの統治はターリバーンの政治論の特徴であるが、ターリバーンのウラマーはジハードに自ら参加する主体である。ジハードとはアッラーのシャリーア施行のための闘いであり、イスラーム世界が異教徒の侵略にさらされている現状においては全てのムスリムの義務であり、特に戦いの最前線であるアフガニスタンにおいてはそうである。ターリバーンのウラマーは、物質的に圧倒的な敵を相手に自己犠牲を厭わずジハードを戦うことによって言行一致の敬虔なムスリムであることを証したが故に、正統カリフの後継者を自任する。ターリバーンの考えでは口先だけでなく実際にジハードに命を捧げるか否かがウラマーの真贋の基準なのである。

ターリバーンと女性

西側メディアによるターリバーンへの中傷の中でも良く知られたものが、ターリバーンによる女性教育の禁止である。「ターリバーンの思想の基礎」は第4講の全てを「女性問題に関する聖法に則った見解」と題する章に割きその女性観を詳述している。ターリバーンにとっての女性とは、信仰における姉妹、また社会における母、妻として敬愛され、庇護奉仕されるべき存在である。ターリバーンの女性観は典型的に家父長的なのであり、それを女性蔑視と考えるのは、西欧の偏見に過ぎない。ターリバーンの支配期に女性教育ができなかったことについても「女性だけの教育のための環境、カリキュラム、黒板、建物等を用意するまでの一定期間、女性教育を延期すること」を強いられたのであり「それは女性の教育の禁止を意味しない」と明言しており、その言葉は、2010年には最高指導者ムッラー・ウマルの命令によりターリバーン支配地に女学校が開設されたことにより実証されているのである。

ターリバーンの変質

ジハードを闘う神学生の集団として出発したターリバーン運動であったが、15年の経過の間に運動は若干の変質を遂げている。15年前にはただの神学生集団だったターリバーンも現在はウラマー集団を自任するに至っている。しかし「アフガニスタン・イスラーム首長国とその成功を収めた行政」を読む限り、シャリーアに基づいて裁定を下せるレベルのウラマーは管区長 (hākim mudīriyah) レベル、400人ほどしかおらず、法定刑の執行などの責任を負えるレベルに至っては州知事 (wālī wilayah) レベルでしか存在しないのが実態と思われる。

また一方でこの15年の間にターリバーン運動は神学生でない若い「世俗」の知識人をも引き付けるようになった。ターリバーンの公式サイトなどから、現在のターリバーン運動には多くの理工系の学生が参加していることが窺われる。このウラマーと「世俗」知識人の協力現象は、ウラマーが政権を握ったイランや、州レベルながらマレーシア・クランタン州のPAS (イスラーム党) においても確認されており、ターリバーンも今後「世俗」知識人の参入は加速することが予想されよう。

ターリバーンの組織

ターリバーンは「信徒たちの長」を最高指導者とし、彼の元に2人の副官、高等諮問会議、中央委員会が置かれる。中央委員会は内閣に相当し、省に当たる(1) 軍事委員会、(2) 布教・教導委員会、(3) 文化・広報委員会、(4) 政治 (外務) 委員会、(5) 初等中等教育委員会、(6) 財務委員会、(7) 捕虜・孤児委員会、(8)

保健委員会、(9) 外国機関委員会、の9つの委員会から構成される。

また地方行政は州、管区、村落に分かれ、州と管区はそれぞれ最高指導者によって任命される長の下に軍事、財務、教育などの委員会が置かれる。最小の行政区は村落で、最高指導者によって任命される長の下に10名から50名のムジャーヒド（戦士）から成る前哨隊が置かれ、この前哨隊は村落の問題を処理し、首長国の最小の行政機関とみなされる。

第二部：翻訳

「アフガニスタン・イスラーム首長国とその成功を収めた行政」²

(序)

イスラーム国家であれ、民主主義国家であれ、専制主義国家であれ、その成功が、また宗教機関であれ、教育機関であれ、政府機関であれその他の何であれ、その繁栄がその組成の正しい管理（高貴な目的、指導者の手腕、取り巻きの自己犠牲など）と秩序立った運営に依拠していることは先人たちの経験から明瞭で、我々の目撃した物事から確証される。この問題における完全な成功には、下された決定、制定された行政命令、確定した原則の施行において、それを指揮する者たちの献身的な尽力を必要とし、またその実行を託された者たちを選ぶに当たって清廉な運営に留意しなければならない。

成功を収める行政の要因の網羅や、イスラーム的行政の特性の解明を私は目指しているわけではない。ここで私に関心があるのは、アメリカとその同盟軍、彼らの残忍な犯罪行為との戦いと聖なるジハードに忙殺されるあらゆる側面での困難な状況に抗しての（アフガニスタン）イスラーム首長国の行政と規制における政策に光を投げかけることにある。また私は、（アフガニスタン）イスラーム首長国の政体、あるいは所謂「ターリバーン」の政体について、アッラーのお助けによって、あなたがたに、ささやかな情報を提供することに努めたい。おそらくアッラーはそれによって我らの雑誌『抵抗』の読者たちを益し給い、信仰する者たちの心を癒し喜ばし給おう。それはアッラーには難しいことではないのである。

求められる目標の高貴さ、望みの目的の神聖性、行政に携わる者たちが十分に明らかになるまで調べた後にそれを彼らの心中に根を下ろさせることが、宣言された求められる目標の実現の成功のための、強い要因であり、働く者たちの心の中に利他、滅私、自己犠牲の精神を活性化させる背後に隠れた秘密である。なぜなら彼らは自分たちの任務の重要性を理解すれば、自分たちに託された任務の全うするために、競い合って邁進し、最高の目標、神聖な目的の実現のために自分たちの力の限りを尽くすからである。それは彼らが自分たちの活動の奥、彼ら

の価値ある仕事の屋上に賞賛されるべき結果と大きな福利を見出すからである。アッラーはそれについて仰せである。「我らが地上で地位を確立し、礼拝を遵守し、浄財を納め、善を命じ、悪を禁じた者たちには、アッラーの御許にその結末がある。」(クルアーン 22章 41節)

加えて有能な者たちから役人を募集し、篤信と清廉の条件を満たした専門職集団を選抜する必要がある。篤信を欠く専門職は行政を腐敗させ、能力を欠く敬虔は行政を弱体化させる。しかし両者(篤信と能力)が背反するなら、篤信が優先される。なぜなら彼(無能な敬虔者)は両足を縛られた牧人と同じで臣民の利益も人々への奉仕もできないだけだが、(有能な)悪人は獰猛な狼で地上に悪を撒き散らし人々に害をなすからである。それは知者たちの許では害の排除が益の追及に優先されることが認められている通りである。ともあれ、適切な者たちを選任することは、成功を収める行政の諸要因のうちでも大切であり、それは「アッラーは汝らに信託物をその持ち主に返還することを命じ給うた」(4章 58節)との至高者の御言葉の帰結であり、また「アッラーの御許で汝らのうちで最も高貴な者は最も敬虔な者である」(49章 13節)との御言葉もそれを指しているのである。

また宗教、思想、政治において民衆を統べる指導者の人格が優れていることも、重要性においてこれまで述べたことに劣らず、成功を収める行政の最重要要因に数えられる。なぜならば指導者こそは物事が立脚する枢軸であり、彼が自らの判断で社会をその目的の実現のために差配し、人々を善と幸福に導き、彼らに悪と破滅を諫めるからである。それゆえ自らの創造主の庇護者(アッラー)に頼り一任した後は、サラリーマンであれボランティアであれ自分を助ける者全ての活動を自分への協力の雰囲気の中で、設定された目標に方向付けることが、指導者の任務の一つとなる。同様に彼は、鈍い心、眠った目を呼び覚まし、人的力を高貴な目標、至高の目的の実現に向けての献身のために活性化させる強い感情を生み出す責任がある。なぜならイスラーム法学と神学の書物に詳述されている自由人身分、男性性、理性と感覚の健常、学識と洞察力、力と勇気、英知と気配りなどの指導者の資質は、その目的のために求められるからである。

1 -

この短い序文に次いで、これから本題に移ろう。(アフガニスタン)イスラーム首長国はその体制において全面的にアッラーの書(クルアーン)とその使徒(ムハンマド)のスナ(言行)、正統カリフたちのスナと教友たち(預言者の直弟子たち)の言葉に依拠し、追隨者たち(預言者の孫弟子)のファトワー(教義回答)と独自裁量(イジュティハード)を行ったウラマー(イスラーム学者)た

ちの見解を学び、過去の諸民族の歴史からも教訓を得る。またその体制には、なんとも神聖な目的、指導者の洞察力、その信仰の力、その体制の従事者たちの経験、献身、信頼性、能力などの資質のような、バランスの取れた成功を収める行政の諸要素が備わっている。

2 -

それゆえイスラーム首長国の行政制度は国の州への分割、適任で敬虔な知事の任命、役人の敬虔と正義への指導、現世と来世を目指す政治を行い人々の需要を満たし人々に宗教の諸事項を教えることを勧奨し、善を命じ悪を禁ずることに全力を尽くすことを勧めることにおいて、正統カリフ時代のカリフ制の諸原則に立脚しているのである。それでアッラーの道のみジャーヒド（戦士）たちの指導規則を定め、常に彼らの善導のための文書を送っている。それは彼らの行いを正し、彼らの考えを啓蒙するため、彼らが光明の中で教友たちに倣うためである。ウマル・ブン・アル＝ハッターブ（第二代正統カリフ）は人々に説教して述べた。「人々よ、アッラーにかけて私はあなた方を苦しめ財産を奪うために総督を送ったのではなく、あなたがたの宗教と慣行（スンナ）を教えるために彼らを送ったのです。それゆれそれを少しでも超えたなら、私にそれを上訴しなさい。私は彼にその報復を行おう。」（Dr. ハサン・イブラーヒーム『イスラーム史』1巻 455頁）。またウスマーン・ブン・アッファーン（第三代正統カリフ）は諸地方の彼の総督たちへ書き送った。「アッラーはその領袖たちに牧人となるように命じ給うた。彼らは取税人になるようには命じられていない。このウンマ（ムスリム共同体）は初め牧人として創られ、取税人としては創られなかった。しかしあなた方の領袖たちは取税人になり、牧人ではなくなろうとしている。もしこのように法を超えれば、羞恥心、信用、誠実さは失われてしまう。最もよい生き方はムスリムの問題と彼らの義務を考察した上で、彼らに権利があるものを与え、彼らから彼らに課されたものを取りたてることではないか。」（同上、1巻 455頁）

3 -

我々の国、イスラームのアフガニスタンの面積はおよそ 65 万平米に達し人口は 3 千 3 百万以上であり、それぞれカンダハール、ヘルマンド、バルフなど、州（wilayah）と呼ばれる 34 の行政単位に分かれる。州はその大小に応じて、ヘルマンド州のマールジャ、カンダハール州のウルガンダーブなど、数々の管区（mudiriyyah）に分かれ、それぞれの管区は多くの地区（mintaqah）、村落（qaryah）を含み、管区の数 400、地区、村落の数は数万にのぼる。

4 -

村落には首長国から選ばれた村長が居り、村の民事軍事に責任を負う。彼には状況に応じて10人から50人のムジャーヒド（戦士）がつく。前村長が殉教死するか、職務に支障をきたした場合、彼ら（ムジャーヒド：戦士）の間の互選で新村長が選ばれるが、対立があった場合には、その問題は彼らの上級司令官に奏上される。この小隊は「前哨隊 (jabhah)」と呼ばれ、昼夜を問わず占領軍の攻撃、戦闘に即応する。またそれは住民にとって、自分たちの間の問題であれ、別の村との間の問題であれ、苦情を持ち込む届出先となる。些細な問題の場合は、問題は部族の有力者の調停に委ねられる。重大な問題は、尊きシャリーア（イスラーム法）の法規に則って当事者の間を裁くために、案件は管区の上級の責任者に上げられる。

5 -

州の管区の全てに住民の間で敬虔をもって知られた管区長 (hakim) がおり、彼にはその地区の事情に通じた副官がいる。彼（管区長）の指揮下で、紛争処理のための司法委員会、教育問題に関わる初等中等教育委員会、戦争を担当する軍事委員会などの委員会が活動する。代官はその管区の全ての地域と村落の長たちの司令官であり、彼がその地区でシャリーアの裁定の訴えにも責任を有する。その（管区長）の任免は、州知事と州レベルの軍事委員会の諮問の上での（首長国）最高指導部の権限である。彼（代官）は州知事の指揮下で働くその管区の直接の責任者である。

6 -

国の州は全て独立の単位であり、それには知事 (wali) と呼ばれる長がいる。彼（知事）には補助する副官がおり、彼（知事）が最高指導部に対するその州の直接の責任者であり、その軍事、民事、財務、司法を司る。この重要な職には多くの場合、経験を積んで有能な宗教心と人徳を有しアッラーのための何者をも恐れずに諸事の処理の出来る信頼に足る誠実な者が任用される。彼の職務にはシャリーアの諸規範、法定刑罰 (hudud) の執行、管区長たちの監督、戦争の作戦の実行、財源と支出の監査が含まれ、司法、軍事、財務、初等中等教育委員会などの州レベルでの権限を有する諸委員会が彼と協同する。その（州知事）の任免は高等諮問評議会の諮問を経て最高指導部による。

7 -

これらの上に、アフガニスタン・イスラーム首長国（全国）レベルでの大きな

権限を有する中央委員会の役割が来る。どの委員会も委任された職務に通じた信頼のおける献身的な複数の委員で構成される。そしてこれら（委員会）は、首長国の現行制度において、事情によりかつての「省（wizārah）」の役割を果たしている。それは以下の通りである。

- (a) 国防省に相当する軍事委員会。若者に聖なるジハードの装備を施し、ムジャーヒド（戦士）に武器、弾薬、兵糧を供給し、軍事作戦計画を立案し、侵略軍の基地やその手先たちの隠れ場への攻撃の指令を出すなど、軍事問題を処理する。
- (b) 布教・教導委員会。大ウラマー（イスラーム学者）から構成され、重要な法学的問題に関するイフター（教義回答）を行い、またウラマー、布教師の任用、ムジャーヒド（戦士）の教導、住民の教化、司令官と部下たちへの忠言を行う。
- (c) 文化・広報委員会。「信徒たちの司令官（Amīr al-Mu'minīn: 首長）」の声明、最高指導部、高等諮問評議会の裁定、声明、決定を放送し、様々な言語で新聞や雑誌を発行し、ムジャーヒド（戦士）たちの宣教、戦果を伝え、また嘘つきの敵たちによる虚報、流言飛語や陰謀に反撃し、インターネットの複数の重要なサイトを通じて彼ら（敵）の主張を論駁する。
- (d) 政治委員会。外務省に相当し、外交関係を担当し国際関係の樹立、その拡大、促進に大いに尽力している。
- (e) 初等中等教育委員会。各種の学校の建設、教育カリキュラムの作成、州の校長（ru'asā' ma'arif）の選任、学校の教師と事務機構の任用を行う。それはイスラーム学と近代的学問の普及、社会からの文盲の一掃と無知の撲滅、新世代の育成のためである。
- (f) 財務委員会。首長国の財源の拡大、出納処理、支出監査などを行う。
- (g) 捕虜・孤児委員会。孤児と捕虜も問題を担当し、捕虜の解放に尽力し、彼ら（捕虜たち）の子弟、殉教者たちの子弟の教育、彼らとその家族の扶養を行う。
- (h) 保健委員会。ムジャーヒド（戦士）たちの負傷者、病人の治療を行い、彼らの扶助、治療中の静養所の提供に留意する。
- (i) 外国機関委員会。それら（外国機関）に緊急避難地への立ち退きを求め、我々の信仰に有害な活動をしないように、それらの活動と従業員を身近に監視する。

8 -

高等諮問評議会は、イスラーム首長国の幹部からなり、そのメンバーの任免は信徒たちの長によって決まる。この評議会の権限には、アフガニスタン情勢の監督、内政、外交の諸問題の適切な解決の探求、首長国（全国）レベルの諸委員会

の活動の指導、国際的、(中東・中央アジア) 地域的、国内的な事件に応じての声明の発出、クルアーンとスンナに照合した法令の発出などがある。

9 -

最高指導部は、最高指導者「信徒たちの司令官」ムジャーヒド(戦士) モッラー・ムハンマド・ウマルに代表され、我らが兄弟「司令官」ムジャーヒド(戦士)は、聖なるジハードの直接の指揮者であり、ムジャーヒドの最高指揮官、信徒たちの指導者との資格において、アフガニスタンの軍事・民事全てについての最高司牧者である。その説教や言説から明白であるように、彼は自分自身、その家族、親族、部族、兵士、部下から始まり、その臣民、世界の全てのムスリムに至るまでに対して、アッラーの崇高なシャリーアに裁定を求めるようになることを切望し、また彼の前の敬虔な(信徒の)司令官たち(正統カリフ)に倣って、職務をその適任者に割り振り、取り巻きを清廉に厳選し、信頼できる適切な者たちを近侍、側近に選ぶことによって公正な統治に努め、政務についている部下たちの行動を身近に監督し、内密の場と公開の場(両方)においてアッラーを恐れ身を慎むことを彼らに訓戒し、彼ら(部下)に臣民に彼らが権利を有するものを与え、彼らにいかなる危害も加えないように命令している。

10 -

彼(信徒たちの司令官)の信頼すべき二人の副官は、篤信と敬虔におけるその助手であり、国土に天与のアッラーのシャリーアを施行するための彼の両腕である。両名は熟練の指導者の命令を何物も付け加えず何物も省かず完全に忠実に実行する。この両名が彼(信徒たちの司令官)のジハードの諸事、当局の活性化、高等評議会の会議や諸諮問会議の開催、イスラーム首長国の諸事万端の運営の遂行に責任を負う。

結語

イスラーム首長国の指導者のアッラーへの信仰の強さ、その目標の神聖さとそれがその従事者たちの心中に深く根を下していること、適任者の選抜による行政の清廉が、英雄性の鍵であり、この国の聖なるジハードの成功の秘密なのである。特に信仰の力とは、英雄的指導者ムジャーヒド(戦士)モッラー・ムハンマド・ウマルが「否」と、不信仰者どもの侵略、無防備な民衆への彼らの襲撃に対して、至高全能のアッラーにのみ拠り頼み、占領に「否」と言い、「我々にはアッラーだけで十分、なんと良き後見人であることか」との先人たちの言葉を繰り返し、宗教と名誉を守るためにジハードを命じたことである。

疑いなく、ムジャーヒドたちはアッラーの側近（ワリー）である。もしムジャーヒドがアッラーの側近でないとすれば、特に我々のこの時代、誰（がアッラーの側近）なのか。そして高潔なウラマーたち、シャリーアの学究たち、アッラーに仕える義人たちが、彼ら（ムジャーヒド）を統率しているのである。またアフガニスタン・イスラーム首長国の求める目標、望む目的は、アッラーの至高の御言葉の宣揚と文字通りのイスラーム政府の樹立、アッラーの敵であるアメリカ人のこの国からの追放である。アッラーは、不信仰者たちの言葉を卑しめ給い、アッラーは真理を真理となし、虚偽を虚偽となし給います。アッラーは聖なるジハードによりイスラームとムスリムを榮譽を与え、多神崇拝と多神教徒たちを卑しめ給います。それゆえ、それにおいて、「競い合う者たちは競い合うがよい」（83章 26節）。

ターリバーン（アフガニスタン・イスラーム首長国）の思想の基礎（1）³
'Abd Al-Wahhāb Al-Kabulī 著

ターリバーン（イスラーム首長国）運動は、西暦 20 世紀の終わりに、21 世紀のイスラーム諸運動の前衛として出現した。至高なるアッラーは地上における最も傲慢な軍勢、つまりキリスト教十字軍世界の軍勢によって、地上で最も弱い軍勢を攻撃せしめることを望み給うた。それは人々が真の力とは信仰の力であり、現代の殆どの人間が崇拝している物質的力ではないことを改めて教えるためであった。そしてターリバーン運動が誕生し、政権を獲得し、そしてそれは人類に、人々が何世紀にもわたって忘れていた新しい統治形態を示したのである。それこそはアッラーの啓示に基づく統治だったのである。

（ターリバーンは）アッラーのイスラーム聖法（シャリーア）を施行し、人々に安全と安心の満喫による幸福をもたらし、不正、腐敗、そして植民地主義者たちが、彼らを崇拝する名ばかりのムスリムたち（アフガン人世俗主義者）の手によってアフガン人に押し付けた無明の法令（qawānīn jāhiliyah）と戦った。それゆえキリスト教十字軍諸国はターリバーンと戦い、不信仰世界はそれに一丸となって矢を引き、不信仰と偽善の諸国民は現代の国際キリスト教十字軍の指揮下にターリバーンの抹殺において合意したのである。しかしアッラーの御恵みにより、イスラーム首長国に不信仰世界の軍勢を前にして堅忍不拔を貫き、そして今や、至高なるアッラーの御意思によって、再び明白な勝利を目前にしているのである。

ターリバーン運動は、その闘争形態、思想、理論武装、世界観、人間観、他者に対する関係を律する基準において、他に例を見ないユニークな運動である。

ではターリバーン運動が政治を行うにあたって基礎とし、それに基づいてその綱領、政策を実践に移すその思想の基礎は何であろうか？

これは世界中の人々がその答えを知りたいと切望している問題である。しかしこの問いに答えるには、その思想的背景、影響の原資料、イスラーム首長国（ターリバーン）の指導部たちが教育を受けた教育方法に遡って語る必要がある。

それによって我々は「ターリバーン」という現象、そしてその統治と政治に関する理論、そのイスラームの聖法（シャリーア）理解、イスラーム史の解釈について知ることができる。小生は長年にわたりこの（ターリバーン）運動の中で活動し、その誕生から発展の諸段階を実際に目撃証人となり、その指導部とメンバーの心理を観察し、また彼らが学んだ同じプログラムと方法（デオバンド派イスラームのカリキュラム）で自分自身が学び、彼らが影響を受けた同じ環境の影響下にあったことから、アッラーは私に、外部からの西欧のメディアの誹謗中傷のプロパガンダによる影響を受けることなく（ターリバーン）運動を身近で知ることが可能にして下さった。ところが多くの人々はそれ（西欧のメディアの誹謗中傷のプロパガンダ）によって（ターリバーン）運動とその振舞についてのイメージを形成し、故意にそれ（ターリバーン）について偏見を助長するか、あるいはその実態について殆ど知らずに、それを怪物視しているのである。それゆえ私はこの論文の中で、（ターリバーン）運動の思想的基盤、運動の基本原則、統治、政治制度、不信仰とイスラームに関するその見解について要約を試みた。私はこれらの基本理論についての私の知識から到達した結論が 100% 正しいと主張するつもりはない。ただこれはこの運動の実態、歴史的イベントや事態の推移に直面してのそれ（ターリバーン）が採った対応から私が演繹したところの、その思想の基本原則、綱領であるに過ぎない。

それら（その思想の基本原則、綱領）は以下の通りである。

1.（ターリバーン）運動の指導部とその創設者たちのイスラーム理解

運動の創設者たち、指導部は、政治家も軍人も全て、イスラーム学を修めた学者、あるいは勉強中の学生、つまりイスラーム学に関わる者である。そして彼らの学問の源泉の典籍は、このイスラーム共同体の先達の時代に、過去の世紀にイスラームの学者たちが著した書籍の中で彼らが学んだイスラーム聖法の諸典拠である。そしてその過去の世紀とは、人々が宗教を、外来の逸脱した解釈や思想の混ざり物がまだ無い純粋な状態で理解していた時代であり、それ（混ざりものと）はイスラーム世界諸国での教育課程に西欧の植民地主義者、イスラームを憎むオリエンタリストたちが影響を及ぼすようになってから後で、近代の（イスラーム）学者たちが書いた書物や教科書を通してイスラームの学知の中に混入したものと

のである。こうした書物の影響の一つとして、それらの書物は、イスラーム聖法の知識を、西欧風に、魂の抜け殻として教えるようになった。そこではそれを学ぶ者は、自分たちが学ぶ宗教理論、イスラーム聖法の規定を実践する必要はなくなった。むしろ、そうした書物は、イスラーム聖法の学知を文化遺産の一つのように教え、それには、イスラーム聖法として真正であり適用が有効であることに疑いを引き起こさせるオリエンタリストの思想の大きな影響が入り込んでいたのである。このような（イスラーム）学者の階層は、イスラーム世界の中で、イスラームを聖法（シャリーア）、人間生活の法としては信じていない諸政府によって設立された国立やそうでない大学によって生み出されたのである。いや、それらの政府は、それ（イスラーム）聖法を現実生活から切り離し、人定法や西欧の諸法にその場所を譲らせるように奔走した。それらの諸政府は人々が西欧思想の悪影響を受けない純粋なイスラームを理解することを望まないのである。それはそれらの政府が真のイスラームの教えから逸脱していることを知って、政府に対して革命を起さないように、である。

一方、ターリバーンは、これらのイスラームを汚す理解を免れている。なぜならば彼らは西欧の手先の ('amilah) 諸政府の支配の及ばない純正の宗教学校 (madrasah) やモスクでイスラームを学んだので、彼らは、先人たちが宗教とイスラーム聖法を理解したのに近い理解による正統な学問方法論と清純な知識を身につけることが出来たのである。勿論、これらの宗教学校には、運営管理、システムの近代化、情報処理の方法などにおいて多くの問題点があるのは疑う余地が無く、またその（宗教学校の）カリキュラムに、知識の領域において新たに生じた不可欠な科学の一部が入っていないことも欠点に数えられるかもしれないのだが。

しかしこうした欠点は、このカリキュラムで学ぶ者たちが、イスラームを聖法の目的に適い、先人たちの道に沿って理解することを妨げはしない。このカリキュラムが西欧思想の様々な影響を全く受けていなかったことは、結果として、この純正な宗教学校の卒業生たちの思想と政治行動と、西欧が彼らの流儀で教育した者たちの思想と政治行動との間の完全な乖離をもたらし、イスラームとその信奉者たちがそれによって義務付けられることと、不信仰とその追従者たちの間には接点がないことになったのである。

これが西欧を怒らせ、不信仰の諸国民をして、政治、統治、法制、国際関係などの生活の諸領域において西欧の様式に従わないターリバーンに敵対するように扇動させることになったのである。

それゆえ西欧は、ターリバーンの思想とそのイスラームの理解に対し、国際的全面的戦争を宣戦したのである。それは軍事力による戦争だけに留まらず、教育、

広報、経済、政治、社会の領域でターリバーンに対して多くの戦いに突入し、これらの諸領域で、この地域において様々な形で現れたターリバーンの影響を根絶するために何千億ドルもを費やした。それはこの（ターリバーンの）思想が、西欧人たちが、イスラーム世界のムスリムたちの脳中に定着させようと努力してきた西欧の諸理論を抹消してしまうことを恐れてであった。それゆえアフガニスタンにおけるイスラーム首長国に対する戦争は、ウサーマ（ビン・ラーディン）師（アッラーが彼を護り給いますように）やその他の逮捕のための戦争ではなく、十字軍の西欧とイスラーム諸国のその手下の支配者たちと妥協しない純粋なイスラーム思想に対する戦争なのである。

ターリバーンの政治理論とその政治的立場について論じたが、次に述べることは、彼らにとってのイスラーム聖法の知識は、学位を取るためや、職にありつくためや、学歴を誇るために学ばれるべきものでは決してなく、いかなる犠牲を払おうとも理論から実践に移すべき宗教に他ならない、ということである。そしてイスラーム聖法（シャリーア）の施行には、ムスリムにイスラームに基づいた体制の樹立を妨げる様々な障害の除去が必要とされるが、この除去は、議論と論証の力が役に立たなかった場合には、軍事力の行使によるしかないことは疑う余地が無い。そしてそれがターリバーンがアフガニスタンを統治した時期に行ったことなのである。

そして彼らは彼らが学んだ自分たちの主（アッラー）のイスラーム聖法の施行のために血を流し命を投げ出しているのである。そしてこれが彼ら（ターリバーン）と、宗教を学問と教育の西欧流の学術研究様式で宗教を学んだ者たちとの違いなのである。大学のイスラーム学者（ウラマーウ）たちは、研究と検証のためにイスラーム聖法の諸学を学ぶが、ターリバーンは、新学校とモスクの申し子であり、イスラーム聖法の諸学を実践と施行のために学ぶのである。

2. 思想、行状、政治、制度における西欧文明の生んだ退廃による思想と知性の汚染の不在

イスラーム諸国（bilad）とその民衆を支配している専制的（Taghutiyyah）諸制度、諸政府の殆どは西欧の植民地主義者によって創られたが、それは彼らが、（西欧人）植民地主義者たちの（本国への）帰還後にイスラーム世界の将来の支配者になるべく彼ら（現地人の欧化主義者）を養成するために、イスラーム諸国に設立した学校におけるこれらの世代の教育とその養成を成し終えるか、あるいは留学生団が西欧人の手で、あらゆるイスラームの影響から遠く離れた環境で教育を受けるために、西欧諸国に派遣された後のことであった。

それで彼らは（西欧人）植民地主義者たちが彼ら（現地人ムスリム）の洗脳の

ために定めたカリキュラムを学び、彼らの理性と思考は西洋哲学と、宗教のあらゆる束縛から解放された西洋人の哲学の無神論に汚染され、統治、政治、制度における非宗教的やり方を習得した。それで彼らの精神が、宗教とそれへの服従の拒否において不信仰の教説に冒され、この世代が完全に西洋風に染まり、西洋の大学から戻った後、植民地主義諸国は、彼らに植民地化されたイスラーム世界の統治権を引き渡したのである。それゆえ彼らは自分たちの政治と行政において西洋の無神論のやり方と理論に従い、イスラーム聖法（シャリーア）を統治と思考から遠ざけ、そればかりかそれに激しく戦いを挑み、生活の全ての領域において（ムスリム）諸民族を（西欧人）植民地主義者たちがイスラーム世界の未来の染色のために定めた基準に則り、西洋風に染め上げるために、様々な新しい様式を定めたのである。それで（イスラーム世界の現地人の支配者の）一部の者たちは無神論の共産主義政権を立て、別の者たちはイスラーム聖法（シャリーア）に法裁定を求めないという意味での「リベラル」な世俗主義政権を樹立し、暴力的支配、拷問、投獄によって舶来の（政治）諸原理を押しつけることによって、イスラーム世界の諸民族に災厄につぐ災厄をもたらしてきた。こうしてイスラーム世界は一世紀を経ずして、そのイスラーム的性格を失い、西欧の尻尾に成り下がり、イスラームは、その地において風変わりなものとみなされるようになり、ムスリムたちもまた自分たちの地において、外国の法令と理論によって支配される異邦人となってしまったのである。

一方、ターリバーンは、世俗主義、民主主義、プラグマティズム、便宜主義、（現世的）利益と快楽の論理、諸国民と諸民族の扱いにおける暴力的支配、裏切りと策謀による語用論などの西洋哲学の生み出した退廃によって理性を汚染されておらず、自らの生の思想、理論、哲学と他者との関係の基準をイスラーム聖法から採っており、非宗教主義が（人間の）生の全ての領域において抹殺したイスラーム聖法の諸規定の再生に取り掛かり、イスラームが命じている限り、「国際社会」と称されるものの承認することに、それが反するか一致するか、などを気にかけず、イスラーム聖法に反し、かつての非宗教的諸政権が輸入した全ての制度、法令を廃止したのである。

それゆえ、人類を西洋の物質的な基準の闇からイスラームの光明とイスラーム聖法の正義へと、そして西洋の諸政策の偽善からイスラームの純潔とその寛大で繊細な教えへ、（西洋の）手先の（イスラーム世界内の現地）諸政権の欺瞞からイスラームの共同体の先達に倣う道へと導き出すところの思想と理論の別のモデルをターリバーンが、ムスリムと世界（全体）に提示しているのを知って、西欧はその（ターリバーンの統治）中に自分たちがイスラーム世界に広め、長年にわたってムスリムたちを誑（たぶら）かしてきた彼らの諸原理に対する危険な脅威

を見出したのである。

それゆえ西洋は、ターリバーンの思想と制度に誹謗中傷を浴びせ始めたのである。それは人々にそれを嫌悪させるためであり、他のイスラームの国々、西洋の法令が人々の宗教的自由を抑圧し、西洋の考え方が人々の理性と思考を墮落させている土地で、ムスリムたちがそれ（ターリバーンの思想、制度）に倣うことがないように、とのためなのである。

3. 国際秩序、国連、その法令、決議等と称されるものに裁定を求めないこと

今日、国際秩序（合法性：shar'iyah dawaliyah）、国連とその全ての文民的、軍事的付属機関、下部機構などと呼ばれているものは、実際には（西洋の）拡張主義的植民地主義の行動、政策を隠蔽し、強国による弱小国に対する政治的、法的支配を押し付けるための、目晦ましにすぎない。イスラームの国々もそうした弱小国の一部である。そしてそれらの強国は、「国際機構」と称されるもの（国連）の法令、決議などを、他の（弱小）国に優越する形で、制定、採択し、不公平な法令によってその（弱小国の）行動範囲を制限し、その手を縛っているのである。これこそが、世界が60年以上にわたって目にしてきたことなのである。そしてそれは実際には、（西洋）植民地主義国家が弱小国、民族に対して犯してきた犯罪を正当化する装置に他ならないのである。

これらの法令を抑圧された民族たち全てに押し付けるために、西洋はそれを驚くべきほどに神聖化し、まるでそれが至高なるアッラーが人類の幸福のためにその預言者たちを通じて啓示した天啓の教えと聖なるものの全ての上にあるかの如くに、それに対するいかなる批判、議論も認めず、その形式の再考も、その条文の変更も認めないのである。

イスラーム世界の諸政体、政府が西洋植民地主義の産物であり、それを牛耳っているのが、至高なるアッラーとその使徒（ムハンマド）を裏切り、自分たちを支配者の座につけ、その地位を保全している植民地主義（西欧）諸国への忠誠を尽くす者たち（名ばかりのムスリム）であることから、ムスリムがイスラームを信奉するように、彼ら（イスラーム世界の為政者たち）はこれらの（国際）機構の法令や決議を信奉し、ムスリムがアッラーの聖法に裁定を求め、自分たちの生活の諸問題にそれを実践するのと同じように、彼ら（イスラーム世界の為政者たち）はそれら（国連の法令、決議など）に裁定を求め、それを実践するのである。

こうして西洋の法制的覇権がイスラーム世界の彼ら（ムスリム）の生活の中に根を下ろしてしまい、これらの法に敵対すること、それに裁定を求めることの拒否は、それに反した国家や民族が集団虐殺、破壊、追放、政権の打倒、国富の収奪によって罰される最大の犯罪と（みなされるように）なり、これらの法令に、

否応なく屈従させられることになってしまったのである。

ところがターリバーンは、この虚構の神話を打ち壊し、それに敵対を宣言し、内政と外政の全てにおいて最初から最後までアッラーの聖法のみを裁定を求めなければならないことを声高に呼びかけ、堅忍不拔に自らの原理と信仰を固守し、それは、いかなる暴風にも揺らぐことは無かった。まことに栄光はアッラーとその使徒と信仰者たちのものである。しかし偽信者たちは悟らないのである。

そしてイスラームを自称する一部の者たちとは違い、ターリバーンにとってこの思想原理は空虚なスローガンに留まらなかった。国際的な決議に裁定を求めるか、万事においてイスラーム聖法にのみを権威として認め国際秩序の決議への屈従を拒むか、との誘惑の試練の選択に直面した時に、彼らの行動が、それを実証した。

そして彼らは、イスラームを固守したが、それはその固守の代償が、多大な犠牲を払い自らの血と命をもって樹立した自分たちの政権、体制を失うことになることになってでもであった。なぜならば、彼ら（ターリバーン）にとって統治の目的は至高なるアッラーの御言葉の宣揚にあるため、アッラーの御言葉が宣揚されていない限り、彼ら（ターリバーン）の考えでは、政府になど、西洋と取引するべきいかなる価値もないからである。

とはいえ、この事は、彼ら（ターリバーン）がイスラームの教えに反しない国際条約、決議を遵守することを妨げるものではない。そしてこの考え方は使徒ムハンマドが弟子たちにマッカからの移住を説いた時に教えた考えと同じものである。つまり使徒はマッカでジャーヒリーヤ（非イスラーム的無明）と共に政権に参加することに同意しなかったのであるが、それはたとえマッカの（多神教徒の）住人たちが、統治、掟、彼ら（マッカの多神教徒）の父祖たちから受け継いだ慣習に基づく裁定において彼らのジャーヒリーヤ（非イスラーム的無明）に（使徒が）手をつけず温存するという条件で、使徒が元首となることに同意していたにもかかわらずであったのである。

こうした（使徒の）考えを甦らせたことは、（イスラーム世界の）支配者たちが権力の座に居座るために、（西洋の）異教徒たちの不信仰の法令にいそいそと平身低頭し、屈従するこの現代における、ターリバーンの偉大な功績なのである。

4. アッラーの宗教のみに忠誠を捧げと虚偽の徒との取引を拒絶すること

試練や苦難が無い限りにおいては、至高なるアッラーへの忠誠を掲げる多くのイスラーム運動、イスラーム団体が存在している。しかし厳しい試練、過酷な苦難に見舞われると、彼ら（自称イスラーム運動、イスラーム団体）は直ぐに妥協、打算に流れ、イスラームの原則を代償に現世の利権の確保するために虚偽の徒た

ちと取引をするのである。それより更に有害なのは、恥ずべき姿で敵たちと同盟することであり、彼らはムジャーヒド（アッラーの戦士）たち、アッラーの宗教の擁護者たちに対する内戦を仕掛け、ムジャーヒドたちに対してテロ、過激主義、（イスラーム学の）知識の不足、イスラームの精神の理解の欠如などの誹謗中傷を浴びせる策謀を企て、（イスラームの）敵（の異教徒）たちが、ムジャーヒドとジハードを貶めるために流布させることに狂奔しているまさにその同じレッテル、スローガンを斉唱しているのである。我々のウンマ（イスラーム共同体）は、イスラームを売り払ったこれらの団体、運動によっていかなる苦難を被ってきたことか。どれほどのイスラームの諸概念が、これらの恥ずべき団体とその振舞によって、歪曲されてきたことか。これらのイスラームに属すると証する諸団体のどれほど多くが、テロと過激主義を非難するとの口実で、ムジャーヒドゥーンに敵対する国際十字軍同盟に加入するのを我々は目にしてきたことか。

しかし、ターリバーン運動は、アッラーの恩寵により、その（設立の）最初の日から、イスラームにのみその忠誠を捧げ、政権の獲得のために、いかなる怪しい団体、党派とも取引をせず、そしてその（政権獲得）後、長い年月わたって施行されないままになっていたイスラーム聖法の実施においても、その忠誠の専一の立場を改めて堅持したのである。そして（ターリバーン運動）は、世界のイスラーム主義者たちができなかったこの偉業を、自分たちに向けられた誹謗、中傷、嫌疑にも拘らず成し遂げたが、この困難な道における確固たる支えとは至高なるアッラーの宗教への忠誠の専一に他ならないのである。

しかしそれで我々はターリバーンがイスラーム聖法の適用においていかなる過失も犯さず無謬であったとも、その内部に邪悪な成員がいなかったとも主張しているわけではない。それ（ターリバーン）もまた、他の全ての運動と同様に、（現世的）野心を秘めた者たち、権勢を求める者たちを内部に抱えており、またアメリカのドルを目の前にするとイスラームへの忠誠心が揺らぐような、昔の（対ソ連）ジハード諸組織からの流入した者たちもいるかもしれない。しかしそうした者たちは、試練に見舞われると（ターリバーン）運動を見捨て、（ターリバーン）運動も彼らを放逐するので、彼らはターリバーンの内部にいかなる地位も保持し続けることはできないのである。（続く）

ターリバーン（イスラーム首長国）の思想の基礎（2）⁴

5. 領主と世俗主義者の指導部からの追放と（イスラーム）学者と宗教者を指導部によるその代替

ターリバーン運動は、この宗教（イスラーム）の精神と、その栄光の歴史に対

する理解に基づき、イスラーム共同体（ウンマ）の政治的指導権は、宗教（イスラーム）学者と預言者たちの相続人たち（学者）に属すると考える。これはイスラームという宗教の教えが明確に定めるところであり、この思潮の最善の実例は、預言者の人格である。というのは、彼は高貴な預言者職の加えてイスラーム国家の最高指導者でもあり、彼こそが共同体に対する政治、軍事、財務、法制の諸事項を司られ、また彼こそが、ムスリム共同体（ウンマ）に彼らの宗教を教え人類を闇から光明へ導き出されたのみならず、イスラーム国家に外交政策の大綱をも定められたからである。

そして彼の逝去後には、ムスリム共同体の指導権は、至高なるアッラーの宗教について最も良く知り、イスラーム聖法の精神を最も良く理解した人間、即ち（初代カリフ）アブー・バクルに委ねられた。そのように指導権は、知者から知者に移ったのであり、彼らの指導の下で、イスラーム国家の領土は広がり、その宣教は世界各地に弘まったのである。

しかし最善の世代（初期三代）が過ぎ去った後、人々が宗教の教えから逸脱したために衰退の局面に入る。そしてムスリム共同体の政治的指導権は、しばしば人類の主の聖法に則るよりもむしろ自分たちの我欲に従って人々を支配する者たちに手渡されるようになった。そこでイスラーム聖法の施行が忽（ゆるが）せにされるようになって、ムスリム共同体の威勢が弱まることになり、ムスリムは多くの領土を失っていき、ムスリム共同体は災厄に次ぐ災厄を味わわれることになり、アル＝アイユービー（サラフディーン：アイユーブ朝始祖、1193年没）やアル＝ガズナウイー（マフムード：ガズナ朝在位997-1030年）やアル＝ムザッファル・クツズ（バフリー・マムルーク朝在位1259-1260年）などの（僅かな）例外を除き、この屈辱の泥沼から抜け出さなかった。彼らは万事においてイスラーム聖法に裁定を仰ぎ、諸事をその支配下に戻したのであるが、彼らはイスラーム聖法の知識を備えていたか、あるいは傍らにいるイスラーム学者たちの学識により啓蒙されていたのである。

しかしこのような繁栄の時代は長くは続かず、支配権は自らの欲望を宗教より優先させ、宗教家、宗教（イスラーム）学者たちを抑圧し、イスラーム聖法の学者たちを政治と指導権の場から遠ざけるよう策謀する専制君主たちの手に渡り戻ってしまったのである。

そして外国人の占領者たちは、ムスリムの土地を支配した後に、宗教を生活から切り離し、世俗主義（la-dīniyah）を広め、生活と統治の諸領域から宗教を根絶し、いかなる役目も無いようにし、生活と政治の問題における（イスラーム）学者の役割を縮減し、彼ら（イスラーム学者）は、こそこそと個人の崇拜の勤行の一部（だけ）を行い、そしてかつては宣教と善導、ムスリムの領土を防衛する

指導者たちを輩出する光塔であったのが、社会から切り離された修道院に成り下がった自分たちの宗教学校でその（個人的崇拜の勤行の）規定の一部を教えるだけになったのである。しかし（外国人）植民地主義者たちは、それだけでは満足せず、官立学校出のムスリム子弟の新世代を要請した。そしてこれらの官立学校は、彼ら（外国人）が設立したもので、その中では、外国人教師か、彼ら（外国人教師）の弟子で、植民地行政の下でオリエンタリストやキリスト教宣教師たちの懷で育まれた我々と同じ民族の子弟の手によって世俗主義のカリキュラムが教えられることを決定したのである。

そしてこの新世代は宗教（イスラーム）に敵対し始め、その諸原則と諸規定を否定するようになり、自分たちが軍事的に撤退した後には彼ら（現地人の新世代）に国事の支配権を委ねた外国人占領者たちに忠誠を尽くすようになった。そしてこの欧化世代の任務は外見上はイスラームに属しているように見えるがその内実は宗教（イスラーム）から離反し、その諸儀礼、諸規定から離反した支配と統治の新しい形態を創り上げることであった。

そしてこの領域（支配と統治）の全てをこの欧化世代に明け渡すために、障害無くイスラームの諸民族をより広い分野で西欧風に染め上げることができるようにと、彼らはイスラーム学者と篤信の徒たちを指導層、（政治的）決定権を有する地位から遠ざけたのである。

こうして外国人植民者たちは、自分たちが撤退する前に、この新世代に、至高なるアッラーの宗教に代わる新宗教を設立したのであるが、それが人類を人間の欲望によって支配する民主主義という宗教であり、それにおいては政治的権利と主権の享有資格において現代における最善の人間（被造物）と最悪の被造物が平等なのである。そして無宗教の支配者たちは、自分たちの有する軍事力と、拷問、投獄の技術の全てを投入して、自分たちの新宗教（民主主義）を確立させたのである。

そしてイスラームの国々での統治の生活のこの様式を持続させえるために、彼らはイスラームの国々での教育法をイスラームの国土における西洋人たちの目的に適合するような方法に染め上げたのである。

諸政府が統括するイスラーム学校や大学における教育法は、また別の問題をも抱えている。そこではイスラーム聖法の諸教科は、魂を抜かれ、技巧を凝らした文飾や現実に合致しないギリシャ哲学の言葉遊びの難渋な表現で教えるようになってしまった。

こうして宗教（イスラーム）は、礼拝、浄財、家族法などの限られた儀礼行為と、数百年も前に存在した思弁神学諸派に属する僅かばかりのイスラームと信条の教義に切り詰められてしまった。その一方で、イスラーム世界を端から端まで

席卷している現代のイデオロギーの諸派、諸団体と、そのもたらす破壊的な悪影響については、これらの国々の我々のイスラーム教育のカリキュラムは扱っておらず、それに警戒して備えることが出来るようになるのに十分な程に人々にその害悪を教えていなかた。その結果として、共産主義がやって来て、人々の思念と感情を魅了し、次いで邪悪な自由主義が到来したが、それはアッラーの人類に対する統治権とその聖法の施行に楯突くものだったのである。

ターリバーン運動が出現したのは、こうした嘆かわしい状況下においてであり、同運動は、政治と支配の戦場に正面から突入し、力関係を逆転させ、価値基準を転換させ、諸事を改めて元のあるべき位置に戻したのである。そしてモスクの導師が再び世界に向かって出かけ世界に対して高らかに「アッラー以外に支配権はない」と宣言し、共産主義者と自由主義者たちの耳に「アッラーの啓示し給うたものに基づいて支配しない者たちは不信仰者である」（5章44節）のメッセージを響かせたのである。

こうしてこの地においてモスクの導師が約千年振りに、政治的最高指導権を再び手にし、モスクの導師こそが、他の何者よりも、最高指導者職 (imamah 'uzma) に相応しいこと、そしてそれこそがアッラーの使徒（と正統カリフたちの慣行（スンナ））であること、ムスリム共同体が非宗教的支配に屈したことは、この宗教（イスラーム）本質に悖（もと）ることを、改めて確証したのである。

そしてターリバーン運動は政府を樹立しイスラーム聖法を施行した事実によって、2世紀近くにわたって西欧がムスリムの心中に深く植え付けようとしてきた大嘘、つまり現代においてはイスラーム聖法が国家と政治の運営に有効ではないとの嘘を反駁したのである。そしてそれによってターリバーン運動は、現実の行動によって、宗教（イスラーム）学徒とモスクの導師たちが、国家と政体の行政運において、彼ら以外の西欧思想のひよっこたちに比べてより有能であることを立証したのである。

しかしムスリム共同体が、「それが成功することはない」と諦めかけていたこの実験に成功するに至るターリバーンの道は決して薔薇色ではなかった。むしろそれは血、命、そして様々な犠牲と、長い忍耐の道であった。彼らはそのために地方（アフガニスタン）、地域（イスラーム世界）、国際的な挑戦に直面し、何万人もの最善の若者、（イスラーム）学徒、クルアーン暗誦者たちを犠牲にしつつ、夜に日を継いで、全ての障害を乗り越え、確固たる信仰と宗教の誇りによって新しい道を切り開き、「人々がおまえたちに対して（抹殺するために）集まっているぞ。それゆえ彼らを恐れよ。」と彼らに言う人々の脅しも彼らを妨げることは出来なかったのである。「『人々がおまえたちに対して（抹殺するために）集まっているぞ。それゆえ彼らを恐れよ。』しかしそれによって彼ら（ムスリム）はま

すます信仰を深め、『我々にはアッラーのみで十分。何と良い後見人であることか。』と言ったのである。』(3章173節)

彼ら(ターリバーン)は、この運動の発展の諸段階のあらゆる局面において彼らに対して為された地域(イスラーム諸国)的、国際的圧力に屈せず、いかに試練が厳しくとも、彼らの信ずる原則に関して取引に応じず、またイスラーム聖法を、専制君主の邪神(Tāghūt)の法や、アッラーの支配に敵対する人間の皮をかぶった悪魔たちの政令と混淆することも決してなかったのである。

不信仰世界がターリバーンを平和的手段と、政治的取引によって買収することを諦め、多くのイスラーム運動・団体を「平和的共存」という酸で溶かし邪神の専制的政体の化粧・仮面に変えて変質させた「民主主義」の鑄型に嵌め込む試みが全て失敗した時、不信仰世界は彼ら(ターリバーン)に対して侵略戦争を宣言し、西洋の悪魔たちがその悪魔的な策謀によってムスリムたちを麻痺させた麻酔による眠りからムスリムたちが覚醒して気付く前に、この(ターリバーンの)(イスラーム学者によるイスラーム聖法に基づく国家建設の)実験を流産させようと力の限りを尽くしたのである。

しかし至高なるアッラーは、不信仰世界と闘うために自分たちの血と命と8年以上前に自分たちの政権が崩壊した時に土に埋めた錆びた弾薬しかない僅かな軽火器しか持たない貧者たち(ターリバーン)の手によって、不信仰世界全てを打ち負かすことを望み給うたのである。

これが、(現在)彼ら(ターリバーン)に色目を使い摺り寄り、自分の手下たちのためにカブールに樹立した政府(カルザイ政権)に抱き込もうとしている虚妄のアメリカなのである。そしてそれ(アメリカ)がこの卑しい立場にまで妥協するに至ったのは、過去8年にわたるターリバーンとの戦争の経験を経てのことに他ならない。

他方、ターリバーン運動は、モスクとその壁龕から外に出た者たちが指導する運動として、国際政治の上で、西洋が育てた世俗主義者の政治家たちが考えたのとは全く違った振舞をしたのである。この(ターリバーン)運動の指導部は、賢明で確固たる立場を貫くことによって、この運動が、国際政治の悪魔たちにその悪魔的畏、策謀によって弄ばれる蒙昧なスーフイー乞食坊主(ダルヴィーシュ)たちの集まりではないことを証明した。そうではなく、統治と戦争と国際的な挑戦の経験によって鍛えられイスラーム学者たちが支配する運動であり、彼らは政治的賢慮と、この地域(イスラーム世界)と世界の政治情勢、謀略に対する精确な理解を持ち合わせているのである。

ターリバーンの思想のこの原則は、ただ政治と指導の領域から領主たちと世俗主義者たちを追放しイスラーム学者をその地位に付けたに留まらず、それ以上の

ことを為した。それは戦争、政治、情宣、国際的陰謀との対決についての賢明な理解を有するジハード戦士たる若者を育て上げたことである。それは強いられた闘争の様々な段階における絶え間ない対応の戦いについての彼らの理解に加えてのものであった。そしてそれが（ターリバーン）運動に、西欧とその手下で自分たちの権力を失うことを恐れて西洋の言いつけには何でも従うイスラーム世界の罪深い支配者たちが率いる十字軍戦争におけるイスラームの諸民族の指導層たちの成員たちを引き付けたのである。この原則をターリバーン運動の思想の諸原則の一つであると述べようと思うなら、ターリバーン運動は、現代においてもイスラーム学者とジハード戦士たちがムスリムを指導する能力があるとの信頼性をムスリムに与えた、ムスリムのイスラーム学者たちに生じた沈滞と固陋を取り除き、再び彼らを指導と統治の場に引き出し、現在と未来の指導と抵抗を可能として備えるために、先行したイスラーム諸運動の経験から学んでいるのである、と我々は言おう。但し、これらの経験はより正しい導き、この運動の全ての側面を包括する歴史学的検証を必要とするのである。そしてそれ（ターリバーン運動）は、イスラームの実践の新しいモデルを提供したのである。そしてそれは先達（イスラーム初期三代）の時代に在ったところのイスラームへの復帰と、信仰の揺らいだ者や偽信者たちが軽視しようとしているイスラームとその敵の不信の諸宗派の間の宗教的・文明的闘争の戦場における現代の新しい諸事象への対応を兼ね備えたイスラーム聖法の枠組み内での軍事・民事の実践を通してなのである。

統治と指導の両分野におけるその（ターリバーンの）指導と霊性の実験は学ぶに値する。そしてイスラームの思想の探求者ともあろうものが、この時勢に、不信者たちがそれ（ターリバーン運動）とそのジハードと統治に関する見解と国際情勢と現代のイデオロギー闘争の成り行きに対するその影響に関心を抱いているよりも、興味を持っていないというようなことがあってはならない。

6. 民主主義を現代の無明の宗教とみなし信仰しないこと

ターリバーンの思想の重要な基本原則の一つに、民主主義を信じず、それをアッラーの最後の使徒ムハンマドへの啓示の導きを拒否し生活の全ての領域において人類の欲望を最終審級とする現代西欧の無明の信仰であると看做すことがある。

ターリバーン運動は、イスラームが政治制度、立法、経済、道徳、社会についての完全な宗教であり、民主主義であれ、他の宗教であれ、法制であれ、継ぎ接ぎをする必要がないことを固く信ずる。そしてそれが至高なるアッラーのその書の明文における御言葉「今日、我は汝らに汝らの宗教を完成し、汝らに我が恩寵を全うした。そして我は汝らの宗教がイスラームであることに満足した。それゆえ、罪に逸れず飢餓に強いられた者には、まことにアッラーはよく赦し給う慈悲

深い御方。」(5章3節)、及び「イスラーム以外を宗教として求める者は、その者から受け入れられることは決してなく、その者は来世において損失者の一人である。」(3章85節)

イスラームは、人間生活の全ての次元を包摂し、復活の日に至るまでの全ての問題、課題を処理することのできる宗教である。それゆえもしそうでなかったとすれば、復活の日に至るまでの人類の他の全ての宗教と同じく、(アッラーは)それに満足し給うことはなく、それから逸れる者を損失者のうちに数え給うことはなかったのである。

またターリバーンは民主主義をアッラーの主権を否定し、多数決の形で地上の至上権を人類に属さしめる現代の無明の宗教であると信ずる。そしてこの多数派が法令を制定し、合法と禁止を定める権限を独占し、また彼らの妄執に従って、自分たちの利権を守るために、支配者を選ぶのである。それで彼らは何事においても真理のアッラーの聖法に従わない。それゆえ民主主義における多数派は、神の地位を占めており、彼らの妄執が神の聖法の地位を占めるのである。

ターリバーンは民主主義について、民主主義とは(キリスト教)教会の墮落、そのあらゆる人権の蹂躪の後の近代西洋の哲学者たちが作った宗教であると信ずる。そこでの立法の源泉は人間の妄執と思念であり、それは重要な二つの原理の上に成り立っている。

その二つの原理とは、(第一は)主権原理である。即ち合法と禁止の最高主権が人間にあり順位においてこの主権より上位、あるいは同位のいかなる他の主権も認めないことであり、それは、モノ、人、状況に対する、特権的多数派の見解から生じた絶対権力なのである。

そして第二(原理)とは、権利と自由の原則である。それは要約するなら、個人に、その自由が他人の自由を脅かさない限り、自分が欲するあらゆることを為さしめることであり、いかなる聖法も宗教も、その宗教や聖法がいかなる(社会での尊敬される)地位を占めていようと、人間にこの民主主義が人間に与えた自由と権利を禁ずることは許されないのである。民主主義には、信仰者も不信仰者もなく、また信仰も不信仰もない。ただそこでは全ての権利における人類の完全な平等があり、またそこには善と悪があるが、善とは多数派が善と看做すものであり、悪とは多数派が悪と看做すものであり、宗教がそれ(多数派の決める善悪)を認めようが、認めまいが無関係なのである。

また、民主主義はこの理論に尽きるわけではない。それは別の諸概念、民主的の制度として知られるものにも及ぶ。その中には西洋の占領者たちがイスラームの国々に移植に奔走して一つの国のムスリムを分裂させるために支援した政治的多党制(多元主義: ta'addudīah)がある。

ターリバーンはムスリムの国における政治的多党制は、諸党派、諸集団が権力の椅子を目指して互いに騙し争うようにムスリムを分裂させる手段であると考えられる。それゆえターリバーンは支配権を得るための避難すべき争いを防ぐために、単一のイスラームの旗印の下に唯一神信仰（タウヒード）の言葉の上にムスリムを統合する単一の公正なイスラーム政体を樹立すべきことを信ずる。また（ターリバーンは）同時に、ムスリムの為政者たちへの助言のために門戸が開かれる必要をも信ずる。なぜならば「宗教とは助言」（ハディース）であり、また「最善のジハードは不正なスルタンの許での真理の言葉である」からである。そして最善の助言とは、ムスリムのイマーム（カリフ）に対して向けられたものだからである。

侵略者の占領者たちが育てた、あるいは諸々の植民国家が育て、遅かれ早かれ自分たちの目的を達するための手段として味方につけるために巨額の投資をしてきた無宗教の世俗主義者や民族主義者などは、イスラームと聖法の基準に照らせば無に等しく、イスラームの地で無宗教の活動を行うことが許可され、認められることは許されない。

アフガニスタンとイスラーム世界のムスリムは、昨日に悩まされた共産主義者たちによる殺人、拷問、追放、宗教と聖なる物の冒涇、ムスリム共同体からの宗教の取り上げを忘れてはいない。ところがこの傷が癒えないうちに、自由民主主義者が西洋の空爆の傘下にやって来て、ムスリムたちに最も過酷な虐待、拷問を味あわせた。そしてアフガニスタン、イラク、ソマリヤ、パレスチナなどのイスラームの国々の出来事は、イスラーム世界で不信仰諸国のおかげで成長したこれらの諸党派（自由民主主義）が犯した罪に他ならない。

またターリバーンは、信仰するアフガン人民の過去 30 年にわたるジハードは民主主義のためでも西洋思想に門戸を開くためでもなかったと考える。そうではなく、それは至高なるアッラーの御言葉を宣揚し、その聖法を彼の僕（しもべ）たちの間に施行するために、人民が数百万人の殉教者を捧げたイスラームのジハードであり、また今もあり続けているのである。

そして我が信仰する人民をこの高貴な目的から逸らし、ジハードと殉教者の地にイスラーム政体を樹立することを妨げる全ての思想、理論は、許容されるべきではなく、むしろアッラーへと近づく献身、その道におけるジハードとして、抹殺されねばならないのである。

それゆえ民主主義はターリバーンの考えでは、その弘布のために世界中を暴力と鉄で席卷する現代の無明の宗教であり、他方彼らの考えではイスラームは別の宗教であり、至高なるアッラーがそれを最善の人間ムハンマドに啓示し給う真理の宗教で、その中にだけ人類の幸福があるのである。両者の間には不信仰と信仰

の違いなのである。

7. 一致団結と無明の民族主義の拒絶

一致団結の維持と無明の民族主義の拒絶はターリバーン運動の重要な原則の一つである。それゆえ、厳しい数々の試練と、運動のメンバーを「過激派」と「急進派」などと名づけたものに分裂させようとの敵たちによる多くの策謀に晒されながらも、一貫して強く団結しており、運動の戦列に分裂、内紛が生じることはなく、不信仰世界全体との運動の偉大な戦いにおける確固たる信仰の立場を取ることによる指導者への適格性を確証したその（最高）指導者（モッラー・ウマル師）の指導の下に、その戦列の統一を維持しているのである。

以下は、この運動における戦列の統一を支える重要な要因である。

(1) 運動の各構成員の（最高）指導者に対する善（なる命令）における自発的な絶対的服従。なぜならばイスラームにおいて、権威者に対する服従は聖法の明文が命ずるところの聖法によって定められた事柄だからである。ムスリムの集団はこの聖法の明文の違反の帰結を警戒しなくてはならない。なぜならば（ターリバーン運動）の指導部と成員の大半は、イスラーム教の学者、聖法の学徒であり、彼らこそそれらの聖法の明文を最も理解しその教えの適用を遵守するのに相応しく、またそれが可能な者だからである。この（聖法の）理解と遵守のために、（ターリバーン）運動の成員たちには、しばしば（他の）イスラーム諸運動の分派が陥るよう妄執の虜になったり、名声や現世の享樂を追い求めることがないのである。

(2) 敵の流言に耳を傾けず、敵たちが（ターリバーン）運動の指導部、様々な事態に対するその立場に関して敵たちが言うことを気に留めないこと。なぜならばイスラーム諸運動の内紛の殆どは、そうした運動の追随者の間に敵が広める流言飛語に起因する指導部への猜疑心から生ずるからである。なぜなら（ターリバーン）運動の成員の殆どは聖法の知識を有しているので、その彼らの聖法の知識が彼らを敵の流言飛語による攪乱から守っているのである。そしてそれは「もし彼らの許に彼らが流す安全と危険の報がもたらされた時、それを使徒と彼らの中の権威者たちに委ねたなら、彼らからそれを知った者たちがそれを知ることになったであろう。もしアッラーからの汝らへの御恵みと御慈悲がなければ、僅かな者を除いて汝らは悪魔に従ったであろう。」（4章83節）との至高者の御言葉の実践によるのである。

彼らは何事も権威者たちに委ね、敵が宣伝する通りに鵜呑みにしたりはしない。他方また、イスラームにおいて服従は、気に入ったことでも、嫌なことにおいてもであり、（ターリバーン）運動の実態に対するこの忠誠と理解が、その戦列の

分裂を防ぐ重要な要因となっているのである。

(3) (ターリバーン) 運動の指導者たちは、残りのメンバーとこの世の生活において全く区別がなく、指導者たちには部下たちに猜疑羨望の念を抱かせるようなことは何もない。なぜなら彼ら(指導部)全員が貧者、庶民であり、人々が暮らすのと同じように暮らし、(ターリバーン) 運動の平メンバーが食べ、着るのと同じものを食べ、同じものを着ているからである。それどころか、指導者たちの生活水準は、平メンバーの状態より質素で粗末な場合すらあるかもしれない。それゆえ西欧人たちは今に至るまで、彼ら(ターリバーン指導者)から没収し、圧力をかける道具にするためのいかなる財産も不動産も見つけることができないのである。この(ターリバーンの指導者たちの) 清貧、質素な生活のために、運動の平メンバーと庶民も、(ターリバーン) 運動の指導者たちがこの世の快適な暮らしに無欲であると納得しており、この特質(質素、清貧)があるために、人々が、(ターリバーン) 運動の指導者たちの周りに結集しようと欲し、彼らからの離反を望まないものである。

(4) 諸運動、諸団体の内部分裂は殆どの場合、地位や職務を巡る競争から生ずる。ところがターリバーン運動においては事情は異なる。というのは、そこ(ターリバーン運動内)での地位とは名誉特権ではなく義務負荷でからである。それは顕職(minah)ではなく試練(mihan)、ジハードと戦闘の戦場への出陣、死、負傷、捕らわれ、苦難に身を晒すことなのである。それは現在の情勢下においてのみではなく、(ターリバーン) 運動の治世においても常態だったのである。その(ターリバーンの) メンバーの一人が今日大臣であったのが明日には最前線の指揮官であり、明後日には普通の職にあり、その後にはいかなる公職にもつかず、その後にはどこかの州の知事になっている、というようなこともあるかもしれない。こうした(ターリバーン運動の) 地位は重い義務負荷であり、人々が手に入れようと競う現世の利権ではないのである。それゆえ(ターリバーン) 運動の指導者たちやメンバーたちの心中には競争心はなく、むしろ彼らは地位を担うことの困難な重責と考え、現世の欲がない者以外はそれを求めないのである。

ターリバーンの敵たちは、運動の参加者たちを過激派と穏健派に分裂させようとしてしばしば試みてきた。しかし運動の隊列の中には彼らのプロパガンダにのせられる者はおらず、彼らの策謀は失敗に終わった。敵たちはこの方法で金銭的・政治的賄賂や莫大な見返りを提示したが役に立たなかった。なぜならば(ターリバーン) 運動への帰属とは信仰とアッラーの道での献身の繋がりでしかなく、地位の獲得のためではないからである。

と言っても、(ターリバーン) 運動の隊列が、利権を求める者、規律の弛緩した者、なんらかの野望を抱く者が全くおらず無謬である、と言いたいわけではない。そ

れもまた他のあらゆるイスラーム運動と同じく人間からなるのであり、天使ではない。ただターリバーンを他の運動から区別するのは、運動の自己監視的性格と苦難の道程のせいで、そうした規律の弛緩した者たち、利権を求める者たちが運動の隊列に残り続けることができない（で淘汰される）ことなのである。病んだ魂の者らは、苦難、試練、生活の過酷さを耐え忍ぶことはできないのである。

また（ターリバーン）運動の結束を強めるものとして、民族（エスニック・グループ）、言語、地域などの忌わしい無明の党派主義を避けていることがあげられる。（ターリバーン）運動はイスラーム・スンナ派の全ての民族から構成されており、その指導者の中にはウズベク人、トルコマン人、タジク人、バルーチ人、パシュトゥーン人、ヌーリスターン人など様々な民族に属する者たちがいる。

これがそれ（ターリバーン運動）がアフガニスタンの全ての州に広範に存在している秘密なのである。（ターリバーン）運動の（人物評価）基準は、献身の純粋性と仕事の熱心さに加えて神への畏れである。そしてそれ（神への畏れ）こそが（ターリバーン）運動が、全き真剣さと決意をもってその維持に努めるものなのである。

ターリバーン（イスラーム首長国）の思想の基礎（3）⁵

[8、9]「純粋イスラーム的方法（uslub）に基づくイスラームの実践、及び政治的制度的行動の方法において西洋への門戸の閉鎖」

また、ターリバーンの思想の基礎の一つに、「純粋イスラーム的方法（uslub）に基づくイスラームの実践、及び政治的制度的行動の方法において西洋への門戸の閉鎖」の理論がある。それゆえターリバーンは西洋の徒弟たち、その思想の布教師たちに対して門戸を閉ざしてきた。それは彼らが（西洋の）影響を受けており、彼らが当初から行おうとしていたその諸原理が（西洋思想との）混ざり物であったからである。

ターリバーン指導部は、西洋の手中で教育を受けその物質的原理に毒された者たちが、イスラームとイスラーム共同体（ウンマ）にいかなる純粋な忠誠をも捧げないことをよく知っている。なぜならば彼らの頭の中にある最高の理想像は生活の全ての領域における西洋の理想像であり、彼らの考えではイスラームとは政治体制や人間の問題の処理とは無関係な単なる精神的な教えを指すに過ぎないのである。それゆえムスリムたちを西洋的生活様式に染め上げることが彼らの一大関心事なのである。これらの者たちは、イスラーム団体で指導部、影響力のある地位に就けば必ず、たとえ名前だけは異なるろうともそれらの内実が西洋思想に合致するように墮落、汚染させようと努めるのである。

但し、ターリバーンのこの立場は、自らの国土と民衆に、安全保障に役立つ科学的な活用を待っているその天然資源を援用して奉仕するために、自分たちが西洋で有益な科学知識を学んで帰国した自らの宗教（イスラーム）と祖国（アフガニスタン）に忠実な専門家、技術者、科学者たちを活用しないことを意味しない。ターリバーンがこの政策を採る目的は、（イスラームへの）憎しみに満ちた西洋の徒弟たちに対して、彼らが国と体制を政治的、思想的、文化的、法制的に牛耳る道をふさぐためである。なぜならばこうした人物たちがイスラーム団体の指導部内に居ること、あるいはイスラーム団体の運営にそうした影響があることは、時間の経過と共に周囲を溶かす溶解性の酸のようなものだからである。

21世紀後半のイスラーム運動の大半（の歴史）は以下の事実を証言している。それらは当初は、イスラーム共同体（ウンマ）の若者に宗教（イスラーム）に対する自尊心を蘇らせ、イスラーム共同体に偉大な奉仕を為した強力なイスラーム運動であり、そればかりかイスラームの国々を植民地の首枷から解放するために武装ジハード、軍事闘争にも参加したが、その後大きく後退し、西洋の諸原理に影響され、政治行動のそれらの様式の一部を取り入れてからは方向転換し、その（イスラーム的）生き方を変え、その思想的言説を変化させた挙句に、終には純真なその創設者たちが基礎をおいたその本質そのものを変質させてしまったのである。その結果、それらの（イスラーム）団体は世俗主義の病弊に冒された民主主義の同類に成り下がり、西洋民主主義の尺度を行動基準とするようになり、広範な基盤を有する連立政権に参加し、政権の座に就くために、世俗主義諸政党の連合に組み込まれることになってしまった。それはあたかも、これらのイスラームを自称する諸団体の最重要目的は、無宗教の諸政党、諸政権に擦り寄るために純正なイスラーム的諸概念を放棄してでも、あるいは信仰者と不信仰者、善人と悪人が平等な西洋流の選挙に参加してであれ、あるいは様々な形でそれ（イスラーム的諸概念）と西洋とを架橋することによってであれ、あるいはイスラームのジハードによって不信仰の（西洋の）傀儡邪悪専制（taghutīyah）諸政権を打倒した後でイスラーム的統治を樹立するために奔走している諸ジハード団体を中傷することによってであれ、いかなる手段によってであれ、政権の座を手に入れることにあるかのようである。

西洋の真似と影響の病弊に冒されたこれらの諸集団は少なくなく、また小さな団体でもなく、沢山あり、大団体でもある。そうした例はエジプト、チュニジア、アルジェリア、スーダン、ヨルダン、トルコ、アラビア湾岸諸国、インド亜大陸諸国、タジキスタン、そして最後にアメリカ人たちが樹立した政府に参加するために占領者たちに味方したイラクなどに見出すことができる。

アフガニスタンと、ほんの暫く前までジハードの旗を掲げ、イスラーム政府樹

立のスローガンを叫んでいたイスラーム及びジハードの政党を名乗っていたその（アフガニスタンの）諸政党は今日、イスラーム世界のその同類の諸政党の中でも最悪の状態に陥っている。なぜなら、それらは全て、なんらかの形で、（西洋の）十字（キリスト教）軍たちがその地を占領した後で樹立した傀儡アフガニスタン行政府の枠組み内で十字の旗の下に立っているからである。

こうした諸団体の一部はジハードとジハード戦士たちに対する露骨な敵対政策を採り（外国軍による）占領政府に公式に参加し、別の諸団体は裏取引、日和見政策に長けており、大胆に公式に宣言して正面玄関から入閣はしないが、そのメンバーと組織の支持層の多くを、様々な別名のカーテンを下ろした様々な隠し扉から（政府が）取り込んでいるのである。そのメンバーの殆どは占領政府に参加しており、ほんの一握りの少数がジハードとジハード戦士を売り物に政府の外に留まっており、政権への参加に唾液が湧いた（欲が出た）時には、傀儡政府との秘密交渉、時には公然交渉をも恥じないのである。但し、それには占領（軍）が将来的にアフガニスタンに遺していく行政府の中で最大の分け前を得ることが条件となるのである。

これらの準世俗主義諸（自称イスラーム）団体の思想における逸脱の根源を探求すると、墮落は以下のような入り口からそれらに侵入してくるのを見出す。

- (1) 生活と業務において、西洋の流儀を採用すること。
- (2) 西洋の徒弟たちがその内部で行動し影響を及ぼすことができるようになること。
- (3) 個人的、組織的行動において、イスラームに基づく忠誠と絶縁の信条を放棄すること。
- (4) 安穏な生活と現世的快樂を求め、粗末な生活と教え込まれた厳格さから逃避すること。
- (5) 不信仰の西洋が「原理主義」、「過激」、「反動」などの蔑称で呼ぶ純粹清浄なイスラーム的な考え方を擁することを恥じること。
- (6) 西欧物質文明の一部の事象に幻惑され、イスラーム的行動において、それと（イスラームの）精神的靈的規律とを取り替えてしまうこと。
- (7) 西洋との闘いの中で育った世代に敗北主義的助言を吹き込み、闘いを早く終わらせるために、たとえ純正なイスラーム的な考え方と信条、純正なイスラーム体制の樹立を犠牲にしてでも、西洋に媚び諂うことに専念すること。
- (8) 邪惡専制政権との戦いと純正なイスラーム的方法論に基づくイスラーム的統治の確立を志向する替りに政権の座に着くことばかりを志向すること。

その他、イスラーム諸団体の墮落の諸原因を成す様々な原因、要因があるのである。

他方、ターリバーン運動は、モスクの壁龕、純正なイスラーム学校の寄宿舎から出立した者たちが指導しているため、現在に至るまで、アッラーの御恵みにより、こうした墮落を免れており、西洋とその西洋化の策謀に反対を表明する政策において堅忍不拔であり、自らの原則を売り渡すことはなく、西洋の徒弟たちが組織に入り込む危険を見逃すこともなかった。それゆえ彼らは西洋に門戸を開放しなかった。そうならなかったのは、彼らが西洋との思想闘争において得心しているからなのである。そして(ターリバーンは)その道を行く政策を継続する限り、至高なるアッラーが望み給う限り、良きものであり続けるであろう。しかし(ターリバーンが)その指導者たちの門戸を、西洋人の思想に従って教育されたか、その影響を受けた者たちに開いたなら、その日のうちから、墮落が始まるのである。

ターリバーン（イスラーム首長国）の思想の基礎（4）⁶

10. 女性問題に関する聖法に則った見解

ターリバーンの思想における女性問題は、それをめぐって西洋に大きな争論を引き起こさせた重要な問題の一つであり、(西洋は)それを口実にターリバーンの思想とその体制を中傷し、西欧のメディアはアフガン女性が不正に監禁され人権を奪われ自由を制限されており、アフガン社会を構成する男性の営為から遠ざけられ、教育や労働の権利を妨げられている等々などのイメージを流布させた。こうして自由主義の西洋は空想の上で、アッラーを主としイスラームを宗教、聖法として、そして(預言者ムハンマドの弟子の)第一世代の「信徒の母たち(預言者ムハンマドの妻たち)」と貞淑に(神のために)奮闘(ジハード)した女性(ムスリム信徒)たちを手本、模範として信ずるアフガン人女性たちの状態について歪曲されたイメージを捏造した。

西洋は、アフガン人女性を無神論の西洋の基準、価値観によるその穢れた観方で眺めることに固執している。

アフガニスタンの女性問題の真相とは何か?この高貴な被造物(女性)に対するターリバーンの見方はどんなものであろうか?ターリバーンの思想における女性の廉直と放縦に関する基準とは何か?アフガン女性の問題に対して西洋が騒音を上げる裏の真の理由は何であろうか?アフガンの女性問題に関連するこうした諸問題に答えるためには、少し遠回りしてアフガニスタンにおける西洋の女性解放運動の背景について知り、ターリバーンがアフガン女性の西洋化運動に対して確固として立ちふさがり、その計画を阻止し、その結果として不信仰世界全体の憎悪を招き寄せることになったかを知る必要がある。

ターリバーンの思想において、ムスリム女性とは宗教における男性の姉妹同胞

であり、(男女)双方の真の宗教(イスラーム)が両者に課した聖法の義務において全く平等である。彼女の兄弟のムスリム男性が聖法の諸規定の遵守を求められるのと同じように、彼女もまた彼女の主の聖法の諸規定の遵守を求められるのである。

イスラーム社会における彼女の地位は、尊敬される母か、大切な姉妹か、気高い娘か、貞婦かであり、いずれの場合も、尊ばれる人間の女性なのである。

そして女性が奉仕され、男性が奉仕する存在であることにより、女性は男性から区別される。というのは、イスラームの聖法は彼女の養育と扶養、尊厳と名誉の保護を男性の責任としているからである。そしてそれは至高なるアッラーが女性の体質の中に創り給うた自然の生物学的相違を尊重することによってしかありえない。なぜならそれによって女性は男性には担うことができる苦役、激務に耐えられないからである。

女性の廉直と放縦に関するターリバーンの思想の基準、度量衡はイスラームが定め、このウンマ(ムスリム共同体)の初期世代のイスラーム学者たちが明らかにしてきた基準それ自体である。

十字軍の西洋が、その無神論的性向からしてイスラームを全面的に拒絶することから、女性の正邪に関するターリバーンの基準を拒否するのも驚くにはあたらない。

西洋の脳内の問題は、その物質的自由主義的な西洋的観点からアフガン女性を見ることから生ずるのである。もし(西洋が)アフガン女性を、彼女たち自身の宗教と彼女たちの社会の慣習、そして彼女たち自身の聖法と民族の文明に対する彼女たち自身の道徳的文化的遵守を通して見るなら、アフガンの信徒の女性の問題に関して西欧が妄想したようなものはどこにも見出すことは無いのである。

しかし西洋人たちの頭の中のこの問題は、植民地主義的敵対的下心、アフガン女性の思想への攻撃から生じているのである。というのは女性らこそが過去何世紀にも亘ってイギリス人、ロシア人、アメリカ人とその十字軍の同盟者たちに、侵略者たちに苦渋を飲ませてきた戦いにおいて侵略者たちに屈辱を味わわせてきた勇敢な戦士たちを生育してきたからである。

西洋はアフガン女性ムスリムの無法な西洋化の波に抵抗し、女性たちがジハード、移住、忍耐、戦闘準備によって父や兄弟や夫や息子と共に戦線に立つのを見て、敵たちは彼女たちへの攻撃方法を変え、その(新戦略の実行)責任を植民地主義(西洋)諸国がイスラーム世界での玉座に就かせたウンマ(ムスリム共同体)の裏切り者、(西洋の)傀儡の(現地人)為政者たちに負わせ、彼ら(現地人ムスリム為政者たち)が法令や政策や制度でムスリム女性に、脱衣、半裸、彼女たちの宗教の規範からの逸脱を強制したのである。これらのムスリムを自称する犯

罪者たちのいかに不正なことか。アフガニスタンでもこうした為政者たちの役割は他のイスラームの国々より少なくは無かった。

ハビーブラー王が王位に就くと彼は自分の妻から洋服を着せ始めた。その後彼の息子のアマーヌッラーが彼の王位を継いだ。新王は少年期から西欧の自由主義にかぶれており、6ヶ月以上にも及ぶ奇態な洋行に出かけ、同行したサルヤー王妃はアフガニスタンの衣装を着て出国したが、膝を丸出しにした洋服を着て帰国したのである。

この西洋かぶれの王はジハードとジハード戦士の国に洋服を広めるために、自分の妻に政府要人たちの集まりで頭巾を頭から脱ぎ捨てるように命じ、彼女は男性たちの間に頭を晒し胸を露にして座り、王は名士たちの妻にも同じことをするように命じ、こうして王妃と宮殿から女性の脱衣とイスラーム聖法に則るスカーフへの反対運動が始まったのである。

その後フランスで育ち自由主義文化に染まったザーヒル・シャー王が登位し、女性の放縦により広く門戸を開き、(男女) 共学と道徳的退廃のあらゆる手段を国に広げ、宗教を「民衆のアヘン」と看做す無神論の共産主義の種をこの国に植えたのである。

その後彼の父方甥のムハンマド・ダーウードが彼の後を継ぎ、共産主義者に殺されるまで彼はその(先王ザーヒル・シャーの) 政策を継承した。

共産主義者たちと共にこの国のソ連の占領が始まり、赤色共産主義への門戸が開かれ、都市の女性の心にまだ残っていた道徳、宗教、貞節、羞恥心は根絶させられた。

共産主義政権が崩壊した時、ラッバーニーが率いるジハード諸組織が政権を握った。しかし彼の政権は聖法の施行と共産主義の生み出した腐敗の撲滅には関心を示さず、他の(ジハード諸組織に対立して共産主義者(の残党)と共闘し、(祖) 国を悲惨な内戦に落としいれ、何十万の世帯が戦火を逃れて(祖) 国を離れて西洋の国々に難民となって脱出した。

これらの家族が西洋に到着すると、西洋社会は彼らを抱き込み、心底からムスリムのアフガン社会を攻撃するための毒槍として彼らを利用するために、墮落した西洋文化に染め上げた。

多大な犠牲の末にターリバーン運動が政権を握ると、(ターリバーン運動は) 大都市で以下のように纏められるような極めて道徳的に墮落した状況を引き継ぐことになった。

- (1) 一連の世俗主義の諸政権が生み出した女性の諸領域における恐るべき道徳的退廃。
- (2) 女性の無規範主義を信奉する無神論の共産主義が生み出した宗教、道徳的退

廃。

- (3) 墮落した西欧諸国における多くのアフガン人の疎外から生ずる腐敗。
- (4) 世俗主義と共産主義の諸政権によるイスラーム刑法の施行の廃棄。
- (5) 墮落した政府が広範に普及させた映画、劇場、クラブ、ラジオ、テレビ、新聞などのメディア、俗悪雑誌、猥褻書籍などによる不品行を広める様々な手段の存在。
- (6) ムジャーヒドゥーン政府が腐敗との戦いに失敗し、政府の要人の多くが墮落した組織のネットワークに絡み取られたこと。
- (7) 教育の全ての段階での共学制度の危険な悪影響。
- (8) 全ての段階での教育、政府機関でのイスラーム式服装の禁止。
- (9) 西洋、共産主義諸国のメディアによるイデオロギー攻撃。
- (10) アフガン人に西洋思想、文化を普及させるための人道、教育、医療支援の装いの下、何百もの西洋諸組織の存在。

かつてこういった原因が女性の諸領域、青年層における極めて危険な状況を生み出しており、この存在する腐敗との戦いはターリバーンに断固たる政策を採ることを要請した。そしてその根絶は、存在する腐敗の規模より強大な矯正の努力なしには可能ではない。それゆえターリバーンは以下のような必要な政策を採ることを余儀なくされた。

- (1) 女性だけの教育のための環境、カリキュラム、黒板、建物等を用意するまでの一定期間、女性教育を延期すること。それは女性の教育の禁止を意味しない。むしろ国の憲法は、女性のための教育の機会を十分に与えることを明記していたのであり、憲法 39 条によると女性教育はイスラーム聖法の枠内で、そのための法律によって定められるのである。
- (2) 女性公務員の退職、彼女らを年金生活に入らせること。
- (3) 聖法の施行と、腐敗の広まりの防止のための、聖法に則ったヒジャーブ（スカーフ）の強制。
- (4) 石打刑と鞭刑を含む聖法に基づく刑法の施行。
- (5) 勸善懲悪省の設立と、人々へのその宗教の教化、忠告と良き説諭によって不品行を自粛しない者の懲戒。
- (6) 西洋諸機関の監視と、その全活動の監督。
- (7) 疑わしい筋の思想的害毒が人々の脳中にその害毒を撒き散らさないように、その出版放送手段を禁止すること。

そして十字軍の西洋と他の邪悪な意図を持つ国々はこの（ターリバーンによる腐敗撲滅）政策を目にしてその（西洋諸国の）迷妄の思想と不信仰の諸理論がアフガン女性と新世代に浸透しないのを悟った時、彼らが墮落させようと奔走して

きたアフガン女性の彼らの言うところでは侵害されている権利を請求すると吹聴し始めたのである。

アフガン人の女性の性状は他のイスラームの国々の女性とは多くの点で異なっている。例えばアフガン人女性はアッラーの恩寵によって未だに健全な信仰の天性を保持しており、彼女らの考えは西洋物質主義に汚染されておらず、移住とジハードに耐え、その日暮らして辛抱しており、露出や裸体よりも貞操と慎み深さを選好している。これらの性質全てによって、彼女らは新しい世代にイスラームの諸原則を教える資格を与えるに相応しい。そしてそれが全ての力をもたらし、彼女らを保護するのであるが、またそれが、西洋が彼女たちの備えていることに我慢出来ないものでもあるのである。それで西洋はアメリカがアフガニスタンを攻撃し、この国のムスリム女性を墮落させる多くの分野を開拓し、その墮落のための包括的な計画を立案した時、アフガン女性に対する隠れた憎悪から安堵したのである。これらの悪魔的な計画は以下の通りである。

- (1) イスラームのヒジャーブを脱ぎ捨てるようにとの女性の扇動。それを彼女が投げ捨てるのは、それ（ヒジャーブ）はターリバーン政権と関係するものだから、ターリバーン政権が崩壊した以上、ヒジャーブも脱ぎ捨てられるべきだ、という訳だ。アフガニスタンに向けられた西欧のメディアはこの領域で重大な役割を果たした。
- (2) 女性問題省という名の女性省の創設。女性は国家問題の一つとなり、それを特別に担当する一つの省が必要となった。この省の創設の裏にある真の下心は、制度的枠組と緻密な計画の下で（組織的に）女性を墮落させることであり、この奇怪な省がアメリカの専門家たちの監督下でそれを執行したのである。おそらくこれは世界の歴史の中でも最も奇怪な省であろう。
- (3) 生活の全領域において男女の混交に場を開いたこと。政治に始まり、教育、商業、娯楽、ミスコン、遊び場、ダンスホール、芸術と彼らが呼ぶところの破廉恥な遊興、ジャーナリズムやメディア、その他の生活環境である。
- (4) 数十のテレビ局を開設とそこでの美女の雇用。例えばカーブル市だけでテレビ放送のための 20 以上の民間局があり、また首都とアフガンの他の州で国营、民営の 200 以上のラジオ局がある。これらの放送局は最悪の猥褻、不品行を放送し、これらの衛星放送が社会の道德構造に腐敗、弛緩、分裂をもたらすために、遂には一部の政府官庁でさえがこれらの放送局に倫理上の監督の強制を求めるに至る程であった。にもかかわらず、傀儡政府は西洋諸国が背後についているこれらの放送局の暴走を抑えることができないのである。
- (5) 西洋社会の以下の 3 原理に基づくアフガン社会の再構築の執拗な行動。

- (a) 万事における男女平等。
 - (b) 男性の女性に対する管轄権を失わせるための女性の生活の（経済的）自立化。なぜなら女性が夫から経済的に自立したなら、性的目的以外に必要としない一人の男性になぜ付き従わねばならず、多くの従属を課す夫婦の制限に従う代わりに性的本能を自由に満たさないのか？
 - (c) 社会生活の清廉、貞潔な整序のためにイスラームが設定した防壁の破壊のための男女の完全な混交。
- (6) 本、雑誌、写真、映画、演劇、ナイトクラブなどあらゆる扇情の手段の大量の持ち込み。警察による倫理規制の廃止、扇情的音楽、若い男女の猥談を放送する数十の放送局の開設。
 - (7) ゲストハウスの名による、大都市での売春宿の開設と、そこへの中国、韓国、旧ソ連圏諸国からの売春婦の輸入。遂には首都カーブルで売春宿の害悪が増大し内務省が介入しその閉鎖を命じたところ、かつては外国人不信仰者専用であったのを再開するようにアフガン人の若者が公然と求めるようにならってしまった。
 - (8) 西洋諸組織によるエイズ対策の美名の下の何百万もの避妊用品の配布。しかし実はそれは保守的なアフガン社会に婚外性交を広めるためなのである。
 - (9) 国内のミスコンへの参加と海外でのミスコンへの派遣のための芸者集団の結成。
 - (10) 聖法の諸規定が紙の上のインクでしかなくともわずかなりとも残存している地方裁判所に訴えることを望まない者をおびき寄せるための、地方裁判所に隣接にしての女性の権利擁護事務所の設立。
 - (11) 油などの食料品で釣って女子を国立学校に誘う一方で男子にはそれを禁ずること。

十字軍の西洋がこれらのことを行うのは、女性であるということによって女性のためではなく、アフガン人女性を信仰の天性から逸脱させ、その貞女の性質を歪め、男性か男性もどきにし、子供たちが西洋かインドの映画を見てその価値観や生活様式の影響を受けるがままに家庭を放置するようにするためなのである。

貞節な信仰者の女性は（西洋の）目障りでしかなく、西洋にとっては彼女にはいかなる価値もない。それどこからそのような女性は殺し、破壊し、夜陰に乗じて彼女らの家を襲撃し、泣き叫ぶ彼女らの目の前で夫を殺すに値するのであり、彼女は家の爆撃による子供の殺害で苦しめるべきなのである。なぜならば彼女はジハード戦士の妻、あるいはジハード戦士の疑いがある若者の母だからであり、それゆえに彼女は家を破壊するか、助けてと叫ぼうとも、牢屋に引き摺って行くべきなのである。

この問題は、問題の本質は、女性のイスラームと信仰との戦いが問題なのであり、女性の権利、あるいは彼女らのターリバーン、あるいは他の誰かに対する闘いの問題ではないのである。

他方、ターリバーンの女性に対する見方は、彼らの心中に深く根付いたバランスの取れたイスラームの見方であり、彼らは女性に授乳され養われ、彼女らの庇護の許に育ち、彼女らの愛情の下にイスラーム教育を受けたのであり、それゆえ彼らは自分たちの血と命を捧げて彼女らの名誉と尊厳を護るのであり、彼女らが西洋の悪鬼や東洋のペテン師どもの慰み物になることを望まないのである。

それゆえ彼らこそ女性とその聖法が彼女らに定める権利の真の擁護者なのであり、彼らこそ墮落した西洋の狼たちから女性を守る者なのである。(続く)

ターリバーンの思想の基礎 (5)⁷

11. ジハードとその装備

今日、多くのイスラーム団体がイスラームのため行動すると自称しながら、ジハードとアッラーの道における戦闘に対して否定的な立場を取っている。理由はイスラームの行動における優先順位を彼らが欠いている為であったり、イスラームに対する理解の不足のためであったりする。彼らはそれ(イスラーム)が執り行う一連の儀礼、あるいは様々な機会に読み上げられる祈りの言葉だと考えているのである。あるいはアッラーの御教えに対する忠誠の純粋性が不足しているためであったり、オリエンタリスト的なイスラーム教育を受けたせいでイスラームの理解が歪んでいるためであったり、現世利益や政府の役職を望んで邪神(ターゲット:不正な支配者)たちにすり寄ったせいであったりする。あるいは、ジハード、戦闘、負傷、投獄、逃避行、戦闘準備などの辛く厳しい道での困難を耐え忍ぶ情熱を欠いているためである。

また一方で、アッラーの道でのジハードを謳い文句にするがそれをスローガンにするだけで、犠牲を払い戦闘現場に出ることを望まないイスラーム諸団体もある。彼らは政府がそのジハードに目を瞑っており、現世での名声を得られる限りにおいて、時に他人のジハードに「アッラー・アクバル」と唱えて拍手を送るだけである。しかし政府がジハードを否定し、それに従事する者(ムジャーヒド戦士)たちに敵対するや、ジハードを口にするのをやめ、その民主主義、人権、過激主義の放棄など腐敗した西洋の宣伝が吹き込んだ諸概念を信仰する市民社会(mujtama' madani)の中での自分たちの地位を失わないように、「民主主義」政権であれ、世俗王制政権であれ、その忠誠を新たにするのである。

他方、ターリバーンは、現代におけるジハードを行う最大のイスラーム運動な

のである。なぜならそれ（ターリバーン）はアフガニスタンにおいて、不信仰と邪神に妥協しないとの決意で、国際十字軍連合に対してイスラームとムスリムを守るために最も過酷な戦場に踏み込み、その戦場で最も気高い奉仕と自己犠牲を捧げているからである。そして（ターリバーンは）不信仰者たち（アメリカとその同盟軍）と、昨日まではイスラームとジハードの名の下に隠れていたが、今日ではあからさまに十字架の旗の下に立ちムスリムに敵対して十字軍に協力する彼ら（異教徒の侵略軍）の手先どもと戦っているのである。

それではその（ターリバーンの）、ジハードの概念とはどんなものか？

現代におけるジハードの必要条件に関する彼らの知識はどうなっているか？

ジハードと戦闘における彼らの目的は何か？

彼らは国際十字軍同盟に対していかなる備えがあるのか？

この（ターリバーン）運動は、イスラーム世界の他のジハード諸団体をいかに見ているのか？

これらが、世界のムスリムたちが答えを知りたいと切望している問題である。彼らはジハードとそれにまつわる諸問題についてのこの（ターリバーン）運動の理解について明白に知りたいと願っているのである。アッラーの御許しがあれば本章で我々はこれに答えよう。

アッラーの道におけるジハードについてのターリバーンの理解：

ターリバーン運動の考えでは、ジハードとは民族主義的諸目的や、祖国主義（wataniyah: patriotism）的利益や、現世の目的の実現のための政治闘争や、軍事的戦争ではなく、またただ祖国主義の邪神（ターゲット：不正な支配者）たちがアッラーの啓示でないものに則って統治するようになるために外国の占領から祖国を解放するための戦争でもない。そうではなく（ジハード）とは、アッラーの御言葉の宣揚のため、アッラーの道に出来る限りの力を尽くして献身するアッラーに対する崇拝行為なのである。預言者が「イスラームの頂上」と形容された通り、それはイスラームにおける崇拝行為の最も高貴な形態なのである。

ジハードの語は、単に「戦闘 (qital)」を意味する「戦争 (harb)」と異なり、アッラーの御言葉の宣揚、イスラーム体制の樹立のためのあらゆる種類の努力、尽力を指す包括的な語である。

ターリバーンの考えでは、ジハードは無目的な戦闘ではない。アッラーの道のためでなければ、ジハードにはならないのである。そうでなければ、「紊乱 (fitnah)」がなくなり宗教がアッラーのみに帰されるようになるまで彼らと戦え。しかしもし彼らが止めるなら、不正な者たちに対して以外、攻撃はない。」(2章 193節)とアッラーが仰せの通り、その目的は紊乱の撲滅でなければならない。

「アッラーの御言葉が至高となるために戦う者が、アッラーの道にあるのである」（ブハーリーとムスリムの伝える伝承）と預言者が言われたように、その目的がアッラーの御言葉の宣揚でない限り、アッラーはそれに満足なさない。それゆえ利己的、宗派的、民族的目的が少しでも混ぜることなく、アッラーの御尊顔のみを仰ぎ、その御満悦を求めるのでない限り、アッラーはジハードとして受け入れ給わないことは明らかなのである。

それゆえこの意味でのジハードは、実のところは、アッラーの御言葉の宣揚、人々をアッラーの導きに従うことから逸らそうとするあらゆる試み、誘惑の根絶のための継続的な努力なのである。そしてそれは、ムスリム共同体が不信仰者による加害から安全に暮らすことが出来るようになり、この共同体が世に現れた目的である善の命令と悪の禁止を行うことを誰も妨げることがなくなるまで、不信仰者たちと戦うことなのである。

こうした理解に立って、その初日からターリバーン運動はこれらの理論武装の上に立ち上がり、不信仰者たちに味方し外国の利権の実現のために内戦で国土の農業と牧畜を破壊した諸団体に反対して立ち上がったのである。

現代においてジハードが個人義務となったとの信条：

それゆえターリバーン運動がそれらの撲滅に立ち上がったとき、不信仰の諸国はターリバーンが「悪と腐敗の諸団体」と呼んでいたそれらの諸団体（旧ムジャーヒドゥーン軍閥諸組織）を支持したのである。そして一部の人々は当時、これらの逸脱諸団体に対するこの命名を認めなかったが、後になってそれらの諸団体の殆どが、アメリカがイスラームに対する十字軍戦争においてアフガニスタンを攻撃した時に十字架の旗の下に立った時に、その（「悪と腐敗の諸団体」との命名）の正しさが明々白々となったのである。

ターリバーン運動は、この時代においてはジハードが個人義務であると信ずる。現代の殉教者アブドラー・アッザーム師が最も有名な著作『ムスリムの土地の防衛は最も重要な個人的義務』の中で先代と後代の高名なウラマーと現代の宗教の実践と学識において信頼されるべきウラマーから伝えている特殊な条件下ではジハードは個人的義務になるというのが、スンナ派の全ての法学派の（一致した）見解である。それは以下の通りである。

- (1) いかなる国であれ、不信仰者がムスリムの国に侵入した場合。
- (2) (ムスリム軍と異教徒軍) 両陣営が対面し、軍隊が出会った場合。
- (3) イマーム (カリフ) が名指しの個人であれ集団であれ (ジハードに) 召集した場合、彼らには出征が義務となる。
- (4) 不信仰者がムスリムの集団を捕虜にした場合。

先代と後代（のウラマー）が上述の状況のどちらか一つでも生じた事態においてジハードが個人的義務となることにおいて合意している以上、これらの全てが一時に実現しているというのに現代においてジハードが個人義務とならないことがいかにしてありえようか。というのは、不信仰者たちが侵略軍として多くのイスラームの土地に力づくで押し入り、何十年も前に両軍の間で戦端が開かれて日を追うごとにその激しさを増しており、ユダヤ教徒やキリスト教徒や共産主義者などの不信心の侵略者たちの襲撃からの防衛のために、正当なムスリムの司令官たちが、東でも西でもムスリムたちを招集しているからである。

またムスリムの捕虜についても、数千人のムスリムが不信仰者の獄中にあり、アッラーをおいて助ける者としてないのであると言ってよい。

そしてアフガニスタンのジハードは、国際的な不信仰の首魁アメリカの指揮下に全ての十字軍国家が国際的的同盟を組んで集合し、アフガニスタン・イスラーム首長国を崩壊させ、その地を武力で占領しているために、あらゆる義務の中で最も重い義務となる。

国連の承認を根拠にアメリカのアフガニスタン攻撃を認める者は、別種の重大な不信仰に陥っている。それはアッラーの啓示以外に裁定を求め、邪神（ターゲット：不正な支配者）の裁定に満足することである。疑う余地無く国連は不信仰の行政府であり、不信仰の大国の利権を守るために創設されたことは確かである。それでイスラームの聖法に反しイスラーム世界に恥辱を与える国連決議の裁定に従うことは邪神の裁定を求めることであり、イスラーム共同体の死命を制する問題において不信仰に満足することなのである。

それゆえ現代においては武装ジハードは個人的義務であるだけでなく、加害と屈辱から自己を守るための、虐げられた者の本能的で自然な不可避の反応なのである。なぜならば西欧は、イスラーム世界に防衛力があるのを見ない限り、我々への攻撃、我々の政府の転覆、我々の国の占領、我々の教育法の改変、彼らの不信心の物質文化を我々に押し付けることを止めようとしなからずである。

ムスリムたちが今日、西欧から蒙っている扱いは、ムスリムに対する陰謀、資源の強奪、諸民族への侮辱、土地の占領、都市の焼き討ち、ムスリムの頭上に何百万トンもの爆薬を降らすこと、ムスリムに敵対するユダヤ教徒に対する国際的な支持、ムスリムの土地へのキリスト教と無神論の布教、悪人どもと背教者たちをムスリムに対する支配者の地位につけること、アッラーの宗教とそのシンボルに対する戦い、イスラーム世界の不信仰の少数派への国際的な支援であり、それに加えてイスラーム共同体の中のムジャーヒド（戦士）と義人たちと戦い、彼らを投獄し、イスラーム世界の経済を支配するために植民地主義的な外資企業を導き入れ、秘密裏に、そして公然と犯す千ものその他の犯罪行為があり、それにお

いて戦車や軍用機、正規軍、軍艦、銀行、企業、ムスリムの思想を攻撃し彼らをその宗教と信条から逸らせ彼らの宗教と来世について知るべき知識を奪うための何千もの教育文化団体を利用しているのである。

そして国連もまたムスリムに敵対する塹壕の上に立っている。カシミール、パレスチナ、チェチェン、キプロス、アッサム問題など旧来の問題において、国連にはムスリムに対する不正しか見出されないのである。

ムスリムたちはこれまでに自分たちに加えられた不正を取り除こうとあらゆる方法を試みてきた。妥協、関係正常化、追従、政治的、不信仰者たちとの軍事的同盟関係の締結、不正な西欧諸国との同乗、民主主義、世俗主義、民族主義、共産主義などの社会生活の様式の彼ら（西洋の）不信心の物質的イデオロギーの受け入れなどである。にもかかわらず彼ら（ムスリムたち）に加えられた不正が取り除かれることはなかったばかりか、むしろ日が経つにつれて増していった。その結果、ムスリムは「おまえたちがジハードを怠り、脱法行為で商売し、牛の尻尾に追従するようになれば、アッラーはおまえたちに屈辱を与え給い、お前たちがお前たちの宗教（筆者注：つまりおまえたちのジハード）に戻るまで（屈辱を）取り去り給わない。」との預言者の言葉の正しさが実証されたのである。

それゆえ交戦状態にある不信仰者とイスラームの国々にある彼らの権益に対するジハードへの復帰は、イスラーム法上の義務であるだけでなく、ムスリムが蒙っている不正を取り除く当然で唯一の処置なのである。なぜならば不信仰者たちは交渉も、問題の公正な平和的な解決も認めないからである。

ターリバーンの考えるジハードの目的の明白さ：

ターリバーンの考えるところでは、ジハードの目標は太陽のように明らかである。それはアッラーの御言葉の宣揚とイスラームのシャリーアの方法論に則ったイスラーム政府の樹立であり、この目標に対していかなる弥縫も中途半端な解決も受け入れない。

彼らは名前だけはイスラーム国家であっても実際には世俗国家であったり、他のいかなる名であれ人間の我欲を法としたりする国家を認めはしない。それゆえ彼ら（ターリバーン）は彼らの政府がアッラーのシャリーア以外に裁定を求めるいかなる機関に参加することも認めず、いかなる過酷な試練に見舞われようともこの立場から妥協しない。この問題について彼ら（ターリバーン）が認めるのは、真の意味において彼らがイスラーム国家を作るか、それとも国家が存在しないかのいずれかである。それゆえ不信仰者とも彼らの手下どもとも国家の形態についていかなる交渉も行わない。これは既定事項で妥協の余地は無いのである。

ターリバーンはイスラームの教えに対する献身において、共産主義とロシアと

戦ったが西洋民主主義に同調しその中に組み込まれムジャーヒド（ターリバーン戦士）に敵対する十字軍の隊列に立ったかつてのジハード諸組織と全く異なるのである。

ここから明らかになるのはその（かつてのロシアと戦ったジハード諸組織の）ジハードはアッラーの御言葉の宣揚のためではなく。権力の座に上るためであり、権力の座に着くことが容易な情勢になると、イスラームとそのシャリーアを犠牲にすることになろうともジハードを放棄し、国際十字軍に抱き込まれたのである。

ターリバーンのジハードの装備：

アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストラリアなどの十字軍国家の世界の最大最強の国々が率いる国際十字軍同盟に対するジハード、抵抗は困難であり、組織化、作戦、浸透における綿密性を要する。なぜならば侵略国家は強大な軍事的、政治的、財政的、広報的力を有しているのに対して、ターリバーンはアッラー以外に味方する者がいないからである。それゆえ現在のジハードによる抵抗はソ連に対するジハードの時期とは非常に違っているのである。なぜなら今回は（中東・中央アジア・南アジア）地域の全ての国々は十字軍の侵略者になんらかの形で協力しており、資金、物資、人員を供給し、空軍基地や軍事基地などの使用を許しているのである。

しかしこれら全てにも拘わらず、ターリバーンは十全な軍備を行い、効果をあげ成功を収めた方法で抵抗のあらゆる領域で彼らの戦力の補給を行っているのである。ターリバーンは以下の領域で効果をあげ成功を収める装備を有している。

(1) 財政的装備：ターリバーンは戦利品、喜捨、浄財、富裕なムスリムの寄付の奨励に代表されるような純国内的な財源、そしてこれらの財源の効率的な運用からジハードの資金調達を行っており、国際十字軍はそのあらゆる物資と手段にもかかわらず、彼らに対する偉大なジハードのこれらの財源を枯渇させることができずにいるのである。

(2) このことはターリバーンが綿密で組織的な財源の管理と処理において優れた能力を有していること、またイスラーム共同体はその不可侵なものを守るためには惜しまず与える者たちであることを証明している。たとえ政府はそれをしなくともである。

(3) 軍事的装備：軍事的装備は、戦闘員と武器の供給、戦闘と防衛の装具の生産、時と場所に応じた戦闘計画の作成、敵陣の目標の設定、宣教の広報、近代戦の訓練などの幾多の領域に関する装備に分類される。

十字軍の広報がムジャーヒド（ターリバーン戦士）の広報より大規模であるにもかかわらず、ムジャーヒドの広報の方がより強力に広範囲な影響を及ぼしてい

ることを既に敵たちさえも幾度と無く認めているのである。

(3) 文学・文化的装備：文学と文化が心底を動かし感情を喚起し、人々に勇敢な行為、献身、贈与を促す効果的な手段であることに疑いは無い。諸共同体は栄光の文化を有し自由、自己犠牲、献身の文学を味わう限りにおいて威厳を保つ。

ターリバーンはアッラーの恩寵によりこの領域においても大いなる装備を有することができた。ムジャーヒド（ターリバーン戦士）の新世代の装備に役立つ思想、軍事、文学の書物があり、ムジャーヒドたちを戦闘と自己犠牲に向かわせる大いなる精神的戦力と看做しうる最も甘美な声とリズムの五千近くのジハード軍歌がある。

これに加えてこれらの効果的なジハードの文学はアフガン人の若い世代を十字軍たちがその軍事基地から放送する破廉恥な歌が広める道徳的退廃の蔓延から護る働きをしている。ターリバーンの野戦指令部の装備は、他の諸組織と根本的に事情が異なっている。この相違の一つが、ターリバーンの野戦指令部は全員がシャリーアの学問に従事する者であることにある。

彼らはシャリーアの学者であるか、(シャリーア) 裁判官であるか、ムフティー(教義顧問) であるか、クルアーン暗記者であるか、シャリーア学徒なのである。そして彼らがシャリーアの学問に関わっていることは、彼らを逸脱、物質的な誘惑の畏に陥ることから護る諸要因のうちの大きな要因の一つとなっている。

アッラーは「このように、ただアッラーを懼れるのは、彼のしもべたちのうちのウラマーだけである。」(35章 28節) と仰せになり、アッラーはその書クルアーンの中でこの意味のことを述べ給うたのである。

ウラマー(イスラーム学者) は他の者たちよりもよりよく試練に立ち向かい苦難にあつて堅忍不拔であることができる。

また相違の一つに、ターリバーンにあつては野戦指令部が一定数の個人に集中し他の者に及ばないわけではないことがある。そうではなくそれは献身と自己犠牲を望む者なら誰でも出入りできる開かれた空間なのである。なぜならターリバーンにおける指令部とは、特権でなく、死、捕囚、苦難、試練の覚悟だからである。それゆえ現世よりも来世を選ぶ者だけしかそれに名乗り出ないのである。この美点があればこそ(ターリバーンの) 野戦司令部は献身的な若者が率先してその周りに集まり、その献身と自己犠牲への呼びかけに応ずる愛される人々となっているのである。

世界のジハード運動とムジャーヒドたちに対するターリバーンの見解：

ターリバーンは、イスラーム、イスラームの信条、イスラームへの献身と奉獻、ムスリムの土地の防衛とアッラーの御言葉の宣揚がムジャーヒドを連帯させてい

る限りにおいて、世界のジハード運動の一体性を信じている。それゆえ彼らの宗教が一つであり、彼らの啓典（クルアーン）が一つであり、彼らの預言者が一人であり、彼らと戦う共通の敵が一つであり、イスラーム政体樹立の夢が一つであるなら、あらゆる場所における国際的不信仰に対して彼らが一体となることを何が妨げるであろうか。真理と宗教の防衛という課題において協力し、助言しあい、共に耐え忍び、互いに助け合うことを、何が彼らに妨げようか。

今日、互いに数え切れないほどの違いがあるにもかかわらず、オーストラリアの十字軍とカナダの十字軍が手を組み、ポーランドの十字軍がグルジアの十字軍と手を組んでいるというのに、なぜ西方のムジャーヒド（戦士）が東方のムジャーヒドと手を組まないというのか。

イスラームとムスリムの土地の防衛の問題はイスラーム共同体（全体）の問題であり、個人や国や組織の問題ではない。それは信条と、ムスリムを一つの共同体とする宗教の問題なのである。「これこそ一つの共同体としてのお前たちの共同体。そして我こそは汝らの主である。それゆえ我を崇めよ。」（21章92節）

今日、敵たちはムジャーヒド（戦士）たち全てを一行に攻撃しており、アッラーの宗教を護る者全てに対して国際的な連合同盟を組んでいる。それゆえアッラーの道のムジャーヒドたちも敵に対して一体となり、相互扶助に邁進しなければならない。そしてそれは「若し彼らが宗教において汝らに助けを求めるなら汝らには援助が課される。ただし汝らとの間に盟約がある民に対しては別である。」（8章72節）

ターリバーンはジハードの戦列の統一に、ここ数世紀の間に誰もそれに類する犠牲を払わなかったほどの犠牲を払ってきた。そしてそれは盟約を確実に護り、忍耐と、廉直と、息が長い持続的方法でムジャーヒド（戦士）たちを誠実に助けてきた。

これが現代におけるジハードとその装備についてのターリバーンの味方の一側面である。彼らの行動がそれを実証し、彼らの理念が理念だけに終わらないこと、アッラーが愛で給う彼の信仰者の僕たちからなる確固たる戦列を彼らが創設するようにアッラーが彼らを助け給うことを我々はアッラーに祈り求める。「まことにアッラーは彼の道にあたかも彼らが堅牢な建物のように一行になって戦う者たちを愛で給う。」（61章4節）

（了）

注

- 1 http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/8176259.stm なお首長国公式サイトのURLは全て2011年1月13日現在使用されているもの。
- 2 “Imārah Afghānistān al-Islāmīyah wa-Siyāsatu-hā al-Idārīyah al-Nājihah”
http://shahamat.info/arabi/index.php?option=com_content&view=article&id=4515:2010-12-18-06-49-42&catid=4:articles&Itemid=7
- 3 “al-Da‘ā'im al-Asāsīyah li-Fikr Tālibān”,
http://www.alsomod.org/index.php?option=com_content&view=category&id=50:44somoodmag&Itemid=58&layout=default
- 4 http://www.alsomod.org/index.php?option=com_content&view=category&id=83:alsomood46magazine&Itemid=58&layout=default
- 5 http://www.alsomod.org/index.php?option=com_content&view=article&id=2672:-----3&catid=87:47somoodmag&Itemid=58
- 6 http://www.alsomod.org/index.php?option=com_content&view=article&id=3186:2010-05-20-19-03-12&catid=88:48somoodmag&Itemid=53
- 7 http://shahamat.info/arabi/index.php?option=com_content&view=article&id=640:2010-07-06-09-21-46&catid=4:articles&Itemid=7